都留文科大學報

第109号

2009.3.23

編集：都留文科大学広報委員会　〒402-8555　山梨県都留市田原3-8-1
都留文科大学内　☎0554-43-4341　URL：http://tsuru.ac.jp/

林信義先生に感謝する会（3ページ）

笠原ゼミ忘年登山　背景に都留市街と三ッ峠（9ページ）

●さよなら文大　三教員、事務局長が退職…2
大学の形成期をともに歩んで　箱石泰和教授
林信義先生に感謝する会（報告…西出公之教授）
31年間私を支えてきてくれたもの　平野英一教授
定年退職にあたって　…都留文科大学での最後の４年…
滝本康男事務局長

●おくることば　……6
初等教育学科　植村憲治教授／国文学科　古川裕佳准教授
英文学科　冨樫　剛准教授／社会学科　菊池信輝准教授
比較文化学科　笠原十九司教授
大学院比較文化専攻　福田誠治教授

●旅立つ言葉　……10
初等教育学科４年　山梨由加里／国文学科４年　白濱　桜
英文学科４年　峰　玲奈／社会学科４年　柏木彰子
比較文化学科４年　佐藤なぎさ
文学専攻科教育学専攻　小久江友見
大学院文学研究科
国文学専攻　望月一仁／英語英米文学専攻　髙瀬裕美
社会学地域社会研究専攻　中嶋　智
比較文化専攻　朴　桂仙／臨床教育実践学専攻　小俣貴美
平成20年度 卒業者・修了者予定数・平成21年度 入学試験状況

●卒業論文・研究論文・修士論文一覧 18
初等教育学科・国文学科・英文学科・社会学科
比較文化学科・文学専攻科・大学院文学研究科

●講演会だより　……30
地域交流研究センター・現代GP共催第５回地域交流研究フォーラム
英文学科・英語英文学会共催講演会
社会学科・地域社会学会共催講演会
比較文化学科・比較文化学会共催講演会

●遠隔教育授業・交流プログラム　……35
新しい遠隔交流授業の実施

●図書館だより　……36
図書館アンケート　調査結果

●文大だより
卒業演奏会を終えて／卒業制作展を終えて　38～39
都留文科大学音楽教室コンサートシリーズ No.23…40
平成21年４月設立の公立大学法人都留文科大学役員予定者を公表 40
山梨の魅力メッセンジャー46名に認定証交付　…41
地域交流研究センター公開教育講座開催　……41
本・ぶんだい堂　……42
編集後記…広報委員　岸　清香講師　……42

さよなら文大　三教員、事務局長が退職

長年本学の発展の為に携わって下さった、箱石泰和教授（初等教育学科）、林信義教授（英文学科）、平野英一教授（社会学科）、瀧本康男事務局長が、惜しまれながら今年度で退職します。長い間、本学の為にご尽力下さり、ありがとうございました。

箱石泰和教授

大学の形成期をともに歩んで

初等教育学科教授　箱石泰和

本学での37年間の教員生活を振り返るとき、きまって込み上げてくる懐かしさ。それは単なる“懐旧の情”でなく、大学の形成期と私自身のそれとが重なっていたことからくるものなのだろう。

専任講師として赴任したのが1972年４月。施設・設備の貧弱さは言うまでもなかったが、もっと驚いたのは教授会の様子だった。

学長はおらず、学長事務取扱が１年以上も職を代行していた。50人弱のメンバーには高齢の方も多く、なかには80歳代の柔道の先生もおられた。定年制が敷かれる前のことである。そのせいばかりではないが、悠長な議論はいつも長引いて、終わるのは６～７時が当たり前。やっと教授会が終わり、大学バスで大月駅へ。列車の待ち合わせのあいだに夕食を、と近辺の食堂に三々五々散らばる。いつのまにか話に花が咲き、気がつくとそろそろ最終列車に近いこともあった。

しかし先生方、とくに若手の先生方は、この大学と学生たちに熱く深い愛着をもっておられた。そのころはもう、学生アパートの何室かが教員宿舎に当てられていたが、それ以前は研究室に寝袋を持ち込んで泊まっていたという人もいた。私もまた週に２日は宿舎に泊まり、ゼミの学生たちと話し込んだり、彼らが帰ったあと明け方まで授業の準備をしたものだ。

学生自治会の要求する全学集会に応じるよう教授会を説得し、自ら議長団の一人に立候補したりしたのもその頃のことである。学生たちの間にはまだ「40年事件」の余韻と、全国的な大学紛争が生み出した熱気が残っていた。４年制大学に移行して十余年。キャンパスには生成期の粗削りだが若々しい雰囲気が満ちていたように思う。

その後、都留文科大学は順調に発展していったようにみえる。下泉学長時代には定年制を定め、これを契機に教授会が若返っていく。大田学長時代には教員定数25名増が市当局に認められ、対学生数で公立大学中最低という悪条件からの脱出が目指された。施設の面でも大きな前進があり、大学らしい大学の形がしだいに整っていった。「文科＝humanities」をふまえて、本学のアイデンティティを「人間研究大学」「よい教師の育つ学問大学」に求めようとしたのも大田学長である。

そうしたなかで、私は私なりにだが、精一杯教師養成の仕事に取り組むことができたと思う。終わってみれば描いていた“夢”に比しての、あまりにも小っぽけな“成果”に愕然とする思いだが、それは自分の非力の故だから仕方がない。ただ、着任して４年後にゼミの卒業生とつくった交流誌が契機となり、やがて彼らを中心とした実践研究のサークルがつくられた。そして、それは今なお続いている。９つの都道県にまたがる40人ほどのメンバーのなかには、もう定年間近の卒業生もいる。こんなことが成り立つのは、愚直だが誠実無比なわが都留大の卒業生ならではのことだ、と思えてならない。

この４月には、あらたに札幌にゼミ出身の校長が生まれる。退職したら応援に駆けつけて、ともに“学校づくり”の仕事に挑戦したいと思っている。私と都留大の絆はそう簡単に切れそうにない。

林信義先生に感謝する会

昭和42年に都留文科大学を卒業し、その後41年間教員として都留文科大学で教鞭をとられた林信義先生は、脳梗塞で倒れられてから休職されていましたが、平成20年６月にご退職になりました。定年を９ヶ月前にしてのことでした。先生の教え子の一人でもある英文学科の西出公之教授に「林信義先生に感謝する会」について報告してもらいました。

英文学科広報委員　鷲　直仁

林　信義教授

去る2月7日、都留市内の山一会館で「林信義先生に感謝する会」が催されました。加賀公英さん（S44年卒）が昭和44・45・46年の英文学科卒業生、林ゼミ・アイスホッケー部のOB・OGを中心に呼びかけ、学校関係の方々には繁忙期にもかかわらず、30人ほどが集まりました。林先生も車椅子でいらしてくださり、一人一人と対面されました。先生はご体調の関係から退席されましたが、川上富久さん(S46年卒)の司会で歓談に入りました。

都立戸山高校で教鞭をとられている野村友近さん（S47年卒)は、林先生のLLは丸山先生の理論的な音声学に連動して実践的な練習がなされるように配慮されていて、実に有益であったと話されました。昨年まで栃木県内の中学校長を務められていたS44年卒の大塚正則さんからは、林先生は学生思いで熱心な先生であったことが話されました。大塚さんは当時としてはほぼ唯一の留学機会であった「サンケイ・スカラシップ」を受験することを林先生から勧められたのですが、応募に必要な写真は林先生が撮影のみならず焼き付けまでしてくださったとのことです。実は、私（S49年卒)に「ロータリー・フェローシップ」を受験するように勧めてくださったのも林先生でした。県内中学で校長をされている安富ひろ志さん（S46年卒）は、県内や関東甲信越地域の英語教育関係の研究会で林先生に指導・助言をいただいたことを話されました。

アイスホッケー部の主将であった野澤健さん（H７年社会学科卒）は、林先生は厳しいけれど優しい人でもあることを語られました。アイスホッケー部の顧問をされていた先生は、文武両道を掲げ、３年次に進級できなかった部員を退部させたのですが、その後もフォローし、１年遅れて卒業した際には、同期のメンバーに声をかけ一席持ってくれたそうです。

卒業して実業界に入られた方々もお見えになりました。キャセイパシフィックを退職されたばかりの長田照夫さん(S46年卒）は、今年度の「キャリア形成論」の講師のお一人でした。ロンドンから駆けつけてくれた古薗一八さん(H４年卒)は、日本鋳鍛鋼株式会社を経て、現在Goodwin International 勤務。日本鋳鍛鋼からは杉村崇晃さん(H11年卒)も見えられていました。二人から伺ったところによれば、日本鋳鍛鋼に就職した都留文科大学卒業生はこれまでで７人、いずれも林ゼミとのこと。

私は、どうしても先輩たちの話を聞きがちであったのですが、若い人たちも参加してくれました。川上明菜さんと中込彩子さんはH15年の卒業。3年次のとき先生が倒れられたので、二人にとっては林先生のゼミは１年だけでした。H20年卒の松田愛美さんのときも、再発されたので、林先生のゼミはやはり１年間だけでした。しかし、先生の「アメリカ研究」や「広告文化」についての講義・ゼミは、非常に興味深く、強く印象に残っているとのことです。

林先生について初期の卒業生からよく聞かれたのが「兄貴的な存在」。「明るい性格」に励まされた人や、「顔が広い」のに驚かされたという人もいました。「面倒見が良い」は、予想どおり、大勢から聞かれました。

「林信義先生に感謝する会」に集った者一同、林先生のこれまでのご指導に改めて感謝し、一日も早いご回復を祈念申し上げました。

英文学科教授　西出公之

さよなら文大　三教員、事務局長が退職

31年間私を支えてきてくれたもの

社会学科教授　平野英一

平野英一教授

私が本学に専任教員として着任したのは1978年（昭和53年）４月でした。その時私はある鬱屈した思いを抱いて来ました。その前月の末をもって私の母校、東京教育大学が筑波大創設によって廃学になったのでした。学部および大学院の修士課程と博士課程を通じて私の学生生活や学びを形づくってきた場が、数年前のストライキ、機動隊導入と学内封鎖による１年半の授業停止など激しい反対闘争の果てに遂に消えていったことに対してやり場のない悔しさと寂しさをかかえていました。歴史と伝統のある大学が学生や大学院生の声に耳を傾けず、ばらばらな教員たちの思惑で大学が運営されて来たことによってそうした瓦解を内部からも招いてきたことを見てきたからです。着任した当時の本学は１号館と図書館しかなく、そこに講義室も研究室も事務局や会議室も何もかも押し込まれた、およそ私がこれまで見てきた大学とは程遠い貧弱な施設しかないところでした。当初はいつまで自分はここに勤められるだろうかという思いも実際に起きました。しかしその後、本学の制度も施設も次第に整備されて大学らしくなってきましたが、この31年間、私をここで支え続けてくれたのは、何よりもこの大学になにかを求めて集まり、授業の中に求めるものを聴き取ろうとして真摯に耳を傾けてくれた学生たち、そしてそうした学生たちへの教育を通じてそこから知りえたものを大学の運営や制度にできるかぎり反映させてよりよい大学を創っていこうとしてきた本学教員と学長の結束した想いがあったからだと思っています。私もこれまでに経験したこともないこうした学生と教員とのつながりが醸し出す本学の輪の中にいつしか深く取り込まれていきました。私がこの31年間、教授会で、学科会議で、委員会で積極的に発言し活動できたのも、教育の現場で学生がどのような事情で何を求めて本学に来たのか、そうした学生に何を与えることが適切かを一番知りえる私たち教員の声を尊重し、それらを集約して大学を運営していこうとする大田、上田、白尾、久保木、金子先生たち歴代学長がいて、そこに結集する教員達がいたからです。私が高校訪問で、本学の地理的条件、施設、周囲の文化環境などの弱点にもめげず胸を張って本学を説明できたのも、本学がこのように現場を尊重して大学を創ってきたし、これからもそうだという自負があったからです。こうした気持ちでこれまで勤めさせてもらえたことが何よりありがたかったと思っております。

法人化という困難な状況の中から、教育と研究の現場に携わる者の声を尊重する大学に向けての努力がなされんことを祈り、教員の方々と事務局の職員の方々にはこれまで懇意にしてくださったことに、また学生諸君にはこれまで真摯に私の授業を聞いてくれたことに、心からの感謝を述べます。

最後の講義

さよなら文大　三教員、事務局長が退職

定年退職にあたって

・・・都留文科大での最後の４年・・・

事務局長　瀧本康男

瀧本康男事務局長

今回の学報発刊にあたって、私にこのような機会を与えて頂いたことに対して、大変光栄に思い感謝しております。

さて、ここでは、私のこれまでの市役所職員として過ごした時期の一端と大学勤務の思い出を述べたいと思います。思い起こせば21年前、それまで右肩上がりで成長を続けてきた日本経済は、安定成長期へと移行されつつ、時代も昭和から平成へと移り、日本経済は、俄かの繁栄の時でありました。（翌年には、株価大暴落・バブル崩壊となる。）そんな状況の中から出てきたのが、竹下内閣の「ふるさと創世」１億円でありました。当時市役所の企画課企画調整係長の任にあり、この1億円をどう使うか悩んだことでした。当時、東京の原宿などの街角には、週末毎に地方から多くの若者が集い、にぎやかな場となっている状況を伝えていたニュースをテレビで見ていた時の事でした。都留の街には３千人を超える若者(学生）が住んでいるのではないか、この1億円は、学生のために使おうという考えが浮かび、早速上司に相談いたしましたところ、快く理解を示していただきました。この事業の総称を「SANTIキャンパスタウン都留」と命名し、その中のS（Science：学術)に位置づけ、早速大学当局と協議に入り、１億円の一部を学生のために使った記憶があります。そのことから大学に多少の縁があるせいか、平成17年４月に大学事務局長（歴代20代目)として着任いたしました。そしてこれまでの４年間を振り返りますと短い期間ではありましたが多くの事を学ばせていただきました。

着任当時、私が関わった大きなことは、行財政改革と都留市の第５次長期総合計画の策定でありました。この基本構想の特徴は、21世紀における都留市のあるべき将来像を描くとともに、市民・事業者・行政が協働して実現に取り組む、まちづくりの方向のトップに、本学を核とする最重要項目として「教育首都つる」を目指したまちづくりの政策が示されているところでありました。

その1つに掲げられております魅力ある大学づくりの施策として「大学制度の改革」という事業があります。これらを受け、本学は、本年４月１日地方独立行政法人法に基づき新たに「公立大学法人都留文科大学」としてスタートいたします。

平成19年４月には、法人化準備委員会が発足し、委員会より法人化に必要な審議結果を市長に報告し、9月都留市議会に「公立大学法人都留文科大学定款」制定についての議案を提出し、可決（附則として、法人の成立の日から施行する。平成21年４月１日付）されたところであります。

次に、新体制とりわけ、事務職員のことでありますが、これからの大学を強固にしていくには「教員が教育と研究に集中」できるように優れた事務組織を作ることが必要不可欠であります。併せ大学のしがらみにとらわれず事務の効率化・合理化などについて改革・改善を図り、学生との堅固な信頼関係を軸に、学生が満足するサービスの継続的提供に努めることが「学生が主体となることに結びつく」ことであります。また、職員の資質の向上に対する研修等を取り入れることにより、これからの大学運営の前提として、教員と事務職員は対等な関係であることと大学運営のパートナーとして、期待がされるところであります。

最後に、これまでの歩みをさらに発展させ、魅力溢れる都留文科大学であり続けるよう、これからは都留市民の一人として応援させていただきます。皆様のご健闘をお祈りいたします。

おくることば・旅立つ言葉

教員から・卒業生から・修了生から

価値観とリーダーシップを大切に

初等教育学科教授
植村憲治

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

皆さんは在学中に授業、交友、部活などの様々な体験を通して多くの知識を獲得してきました。むろんそれらの中で最大のものは、学業を通してのものであったはずです。しかしながら、この期間に獲得した知識は、皆さんの体内ではまだ体系化されていません。ばらばらのままで無重力空間をさまよっています。自分自身の価値観を作り出すことによって皆さんの知識は、整理され、構造化されて活用できるものとなります。そして今後習得する新たな知識もそれらの構造の中に埋め込まれていきます。社会に出てからは、自分自身の価値観を作り出すことに務めて下さい。自分自身の価値観を持つことにより、社会がより鮮明に観察でき、自分の行動に自信が伴ってきます。

人間社会において共同活動が重要であることを考えれば、リーダーシップについて自分自身の価値観を持つことは重要です。行事、プロジェクトの責任者、学校での担任、これらから始まって様々な場面で人の集団をまとめていくことが必要になります。将来に備えて、リーダーの基本技能を習得するよう心がけて下さい。人の名前を覚えることは重要です。名前を間違えることをおそれてはいけません。覚えようとしていることが相手に分かるように行動して下さい。150人以内の組織であれば、指導者は全員の顔、名前、性格など個人を詳しく覚えることが可能だそうです。会議の司会をする場合もあると思いますが、名前の分からない人を指名するのに、指で指すのは最も下品な行動です。緊張感のない会議から生まれた結論は多くの場合欠陥を含んでいます。さらに、緊張感のない会議に慣れた人々は思慮深い行動が出来なくなります。

知識を増やすだけでなく、それらを有機的に結合させること、リーダーとしての資質を備えること、若者にはそれが必要です。

変ること変らないこと

国文学科准教授
古川裕佳

皆さんご卒業おめでとうございます。入学式の頃はまだ制服の匂いがする感じだったのに、メイクが上手になったり、意外にヒゲが似合ったりするようになって、今やすっかりスーツが身につくようになっています。また国文学科の学生として、初め「何コレ？！」だったくずし字を読めるようになり、ただの読書好きではなく文学を論じられるようになり、今やしっかりした大人になっています。ちょうど皆さんが入学したときに着任した私は皆さんの変貌ぶりに取り残されるような気がするほどです。

伊坂幸太郎の『砂漠』は、大学をオアシスに実社会を砂漠に例えた小説ですが、仙台の某国立大学を舞台として、入学から卒業までの間に主人公たちが様々な出来事（演説あり、犯罪あり、超能力あり）に遭遇し変ってゆくさまをユーモラスに描いています。登場人物の一人である西嶋は、戦争大国アメリカを批判するせめてもの意思表示として麻雀で平和（ピンフ）を上がろうとするなど、独特の倫理観

卒業生におくることば

フツーに自由

英文学科准教授
冨樫　剛

ご卒業おめでとうございます。この４年間、講義や演習を通じてさまざまな知識が身についたことと思います。部活動やサークル活動やアルバイト、日々の友人関係や人付き合いのなかで、多くを見て、聞いて、触れて、感じてきたことと思います。思い出して楽しいこともそうではないことも、今日のみなさんの一部となっていることでしょう。４年前の４月、都留に入学した日と比較すれば、自分が大きく変化し、成長していることに気づくのではないでしょうか。

さて、人生の本番はこれからです。社会のなかで自分の責任において生きる人間として、ことあるごとにとまどって自分のあり方をふり返ることでしょう。これまでの人生でそうしてきた倍以上に頭をひねることになろうと思います。時には、もうダメ限界、いっぱいいっぱいだから勘弁して、という気分にも当然なるでしょう。

冨樫ゼミ最終日

私が思うのは、そうして過ごすよくも悪くも密度の高い日々をぜひ楽しめるようになってほしいということです。というのも、そんな日々のなかのさまざまな場面に自由な選択があるからです。上司に対して言いたいことをぐっとこらえるのも自由、言ってしまって危ない橋を渡るのも自由です。仕事のストレスを遊んで発散するのも自由。食べてもいいし、飲んでもいいし、歌っても、旅しても、運動しても、絵を描いても、恋しても・・・もちろんいいですよね。人の道からはずれなければ何でもOKなわけで、なんなら転職してもいいのです。その前に勉強して資格をとったりしたら完璧です。つまり、社会人として生きるということは、日々自由な選択をして生きることであるわけで、毎日（仕事で拘束される時間を除けば）ごく当たり前に自由なのです。

ということで、みなさんが日々を楽しめる社会人として、前向きに人生を歩んでくれることを心から祈りつつ、今日のお祝いのことばに代えさせていただきます。ご卒業、本当におめでとうございます。

と魅力的な屁理屈の持ち主（いかにも伊坂ワールドらしい）で、そのキャラクターは入学以前から在学中もずっと変りません。だからこそそのブレの無さが仲間たちにとって一つの指標ともなるのですが、結末では西嶋は大学を卒業しません。作品は、変らない彼を卒業させないことによって学生という時間の特殊性を表わしているかのようです。西嶋のような存在がそのままでいることのできる場所という意味でも大学はオアシスなのでしょう。

だとすれば西嶋のような（また『三四郎』の野々宮君のような）存在を生かしておくということが大学の役割なのであり、それは『三四郎』の時代以来変りません。都留文科大学というオアシス（まさに秘境の楽園）から砂漠に出て行く皆さんには、苦難もあるでしょうし変容させられることもあるでしょう。しかし旅をする準備はできているはずです。そして何かのときに戻れるように文大は変らないまま皆さんを待っています。

卒業生におくることば

卒業おめでとうございます

社会学科准教授
菊池信輝

ご卒業おめでとうございます。みなさんがお生まれになったのは、今日「バブル経済」と、いささかありがたくない名前が付けられてしまっている時代です。

しかしながら、当時を「同時代史」的観点から振り返ってみますと、今日と似ているところが多々あり、今後を考える上でもいろいろなヒントがあるような気がします。

まず、「バブル経済」の前には「円高不況」というものがありました。その頃某大学では、入試に「円高ドル安になると日本経済にどんな影響をもたらすか」という問題を課しました。そこで、ある受験生はこう答えました。

「輸出製品の価格が上昇してしまい、日本から米国への輸出が不利になるため、不況になって第二次産業が衰退し、サービス産業などの第三次産業への産業構造の移行がみられるようになる。しかし、労働集約型の第二次産業に比べ、知識集約型の第三次産業では、雇用される労働者の数が少なくなる可能性がある。よって、労働需給ギャップの発生で失業問題が深刻になる」

さてさて、その学生は見事その大学に合格したので、おそらくこの答案は正解だったものと思われます。ところが大学に入学した直後、「円高不況」のはずが景気が良くなり、サービス産業がどんどんと雇用を生んでいきました。円高は確かに輸出にはマイナスだったのですが、原材料が安くなる分輸入にはプラスで、輸入品が安くなって需要を喚起するとともに、企業に円高差益が蓄積されたからです。

しかも、「円高不況」を心配し、政府は金利を下げ、公共事業の大盤振る舞いをしていたので、余ったお金が株式市場と不動産市場に流れ込み、株価と地価も上昇しました。俄資産家が生まれ、海外のブランド品が飛ぶように売れていきました。

某大学は「出題ミス」を犯したのでしょうか？

次に皆さんがこれまで過ごしてこられた時代を振り返ってそれを検証してみましょう。

第一点、産業構造の変化に対する見込みが外れたことが挙げられます。日本ではその後必死に「構造改革」とやらに取り組むのですが、結局第二次産業が基本であることに変わりはありませんでした。それは今回の米国のバブル崩壊で、輸出減から本国以上に急速な景気後退に見舞われていることに明らかです。

出題ミスというより、日本の産業構造自体の問題のようです。

第二点、円高をあたかも米国の陰謀であるかのように捉え、国難と見る見方自体が問

都留の山はありがたきかな

比較文化学科教授
笠原十九司

石川啄木の有名な短歌に「ふるさとの山に向ひて言ふことなし　ふるさとの山はありがたきかな」というのがあります。

卒業される皆さんはこれまで、都留の山々に囲まれ、静謐な環境で学園生活を楽しみ、これから都留の山々に見送られて社会へと旅立って行くことになります。

「ゲド戦記」シリーズの翻訳で知られる清水眞砂子さんの講演録『幸福に驚く力』（かもがわ出版）の「あとがき」に、都留文科大学比較文化学会の講演に招かれて来た時の学生との交流にふれ、「私はこの山中にきらりと光る宝石のような大学にでかけ、翻訳という仕事について語りました」と記しています。

ところで皆さんは、皆さんの勉学生活を見守ってきた都留の山々の名前を知っていますか？山も人と同様に、それぞれの山に接して付き合い、山名を知ることによって「友達」になれるのです。私のゼミでは、学生と山を「友達」にさせるため、毎年春と冬に都留の山々を登ってきました。

文大の真南にキャンパスを抱くようにして聳えているの

卒業生・修了生におくることば

題です。今回の米国バブル経済で明らかになったように、日本が輸出で儲かるということは、米国人が借金までして日本製品を買ってくれていたということです。また、円高は各国から日本が信頼されている証しでもあります。

残念ながら、出題者も回答者も、そうした観点は持てていなかったように思います。

皆さんはこれらの経験を活かし、強くなった円をどう使っていけばいいのかを冷静に考えられるはずの世代です。的確な判断のもとに今後の日本を作っていって下さい。ご活躍を期待しております。

贈る言葉

大学院
比較文化専攻教授
福田誠治

修了おめでとうございます。

学部の学生とは違って、一人ひとりの行動が確かめられた大学院時代であったと思います。ただただ学ぶだけでなく、研究者の端くれとして、自分から問題に向き合うことになったと思います。

知識は、他人から与えられるのではなく、自分から探し、構成していくものです。こうして、自分なりの世界の見方が作り上げられていきます。世の中の誰もがそんな研究者・探求者になるべきですが、大学院生は意図的にそう育ったはずです。

私がフィンランドに通うことになったのも、ＯＥＣＤ本部に入れることになったのも、全く偶然でした。しかし、知りたいと思えば道は開けてくる、知りたいと思うからこそ知識はできてくるということを実感したこの４年間でした。知りたいと思ったとき、どうすれば調べられるかという方法論を身に付けられるようにするのが、学校の役目です。いわば、学び方を学ぶ場所が学校なのです。卒業された後は、毎日毎日が、その実践となります。

この一年を振り返れば、世の中の変化の大きさを感じます。百年に一度の大不況という人もいます。アメリカの金融企業が次々に破綻し、今はアメリカを代表する巨大な自動車産業も倒産の危機にあります。こんなことを一年前に誰が予想したでしょうか。

いずれダメになると誰もが思いながらも、そこから抜け出せなくなる。人々が、欲にとりつかれて、社会をコントロールできなくなっている。人間の進歩とは何だったのでしょうか。学問・研究の蓄積は意味があったのでしょうか。そんなこだわりを持ちながら、専門家として社会で活躍しながらさらに育っていってください。

が文台山（1198m）。一字替えれば文大山つまり都留文科大学の山、バックグランドです。文大の東方に見える三角錐の山が九鬼山（970m）で、地下をリニアカーのトンネルが通っています。『花の百名山』で知られる随筆家の田中澄江さんが九鬼山に登った時のことを『沈黙の山－私の歴史山歩』（山と渓谷社）に記しています。その中で、都留の伝統ある歴史にふれ、「山梨県下にあって、全国からの俊秀を集める都留文科大学の存在は、その誇りを示すものであろう」と書いています。

３号館の北側の窓から見える山が、右から順に高川山（975m）, 鶴ヶ鳥屋山（1374m）, 三ッ峠山（1785m）となります。昨年の笠原ゼミ忘年登山で登った三ッ峠山頂から真正面に見た富士山は圧巻でした。

最後に、文大と都留の四季を詠んだ拙句を餞にしたいと思います。

キャンパスを下見の親子三月尽
図書館を包みこむ風花つつじ
花は葉にいつかほどよき受講生
山峡に収まるキャンパス夏鶯
滝風や葉騒を豊に桂川
遠蜩前期終はりし研究室
八朔祭文大生のお姫さま
講義終ふ秋冷すでに街灯る
屋上に学生寒し煙草の背
他人めくスーツ姿や卒業子
娘も母も晴れ着に満ちて卒業式

旅立つ言葉　卒業生から

卒業にあたって

初等教育学科４年
山梨由加里

「小学校の先生になりたい！」この想いを胸に都留文科大学に入学し、早くも４年が経ちました。この４年間は私自身を大きく成長させてくれた貴重な時間でした。特に教育実習での子どもたちとの出会いは、私にとって非常によい出会いとなり、夢を諦めかけそうになった時も私の心の支えとなっていました。またこの頃から、「自然な笑顔があふれるクラスにしたい」という理想の教員像も考えるようになり、「絶対になるんだ！」という想いで満ち溢れていました。

４年間での一番の目標と言っても過言ではない教員採用試験に向けての勉強は、自分を見つめ直す良いきっかけとなりました。毎日友人と、朝から夜までゼミ室で切磋琢磨しながら学び、良い雰囲気の中勉強を進めました。私は、今まで人に任せたり、頼ったりすることができませんでした。勉強も一人で淡々とやる方がいいとさえ思っていたこともありました。また、自分の考えに固執し、他の意見を受け入れられなく、自分で自分にプレッシャーを与え続けてきたのも事実でした。

そんな私が共に学ぶことができたのも、同じ夢を持つ友人との出会い、そして一人でできることは限られているということに気付き始めたことが大きかったのではないかと思います。みんな自分にはない何かを持っていて、一人では気付くことのできない様々な考えがある。それが自分と全く正反対であろうと自分の中に取り込んでいくことで考え方が広がり、一回りも二回りも大きく成長できるのではないかと感じ始めました。

広い視野を持ち、様々な観点から物事を考える。どんな考えでも受け止めていく。これは教師にとって非常に大切なことであると思います。それが欠けていた私を変えてくれた、友人やゼミの教授には感謝してもしきれません。また、いつも私のわがままを受け止め、支えてくれた母にもありがとうと伝えたいです。今後も人と人との関わりを大切に成長し続けていける人間でありたいと思います。

社会副免４人旅行

入学時のホームシック、そして今

国文学科４年
白濱　桜

４年前の春、不安を抱えて遠く長崎県から入学しました。教員免許が取得でき、中期日程があるという理由で、詳しいことは全く知らず受験をしました。そのため、合格はしたものの、入学手続の締め切り寸前まで迷いに迷いました。入学当初は、心の整理がつかず、ホームシックになったこともありました。五月を過ぎると、大学生活に慣れ、友人たちと親しくなっていくことで、次第に充実した日々に変わっていきました。卒業を迎える今、私は都留文科大学に入学して良かったと心から思います。

大学４年間は、思っていたよりも早く過ぎました。ふり返りますと、毎日の授業、週一回の王朝文学研究会やSATでの学校体験、長期休暇の際に行ったアルバイト、３週間の教育実習など、日々一所懸命に取り組みました。一方で、ゆっくりと流れた時間で、将来のことをじっくり考えることにつながりました。娯楽の少ない都留の町では、必然的に勉強に集中することができましたし、友人たちと多くの時間を共に過ごすことで親密になることができました。都留文科大学に進学したからこ

旅立つ言葉　卒業生から

太陽のような人

英文学科４年
峰　玲奈

大学生活の中で、私は初めて夢中になれるものを見つけた。部活動は私の大学生活を語る上で欠かすことのできないものになった。ラグビー部でマネージャーを務め、決して立派なマネージャーだとは言えなかったけど、プレーヤーのために自分のできることを一生懸命行った。プレーヤーに対する想いは常に誰にも負けない気持ちでいた。彼らの真剣な姿が自分の力となり、少しでも力になれるように、笑顔になってもらえるように努力した。もめることもあったし、決して強かったわけではない。しかし、熱い心と一生懸命さとみんなの絆の深さは、どんなものにも負けない輝かしいもので、私達の誇りである。できることが必ずしも大切ではなく、できるようになるために一生懸命取り組むことに意味がある。その一生懸命さが周りの人にいい影響を与えてくれる。それを教えてくれた部活動での時間や一緒にがんばってきた仲間は、かけがえのないものであり、これからの目標も見つけることができた。

試合前に円陣を組む

この部活動や今までの学校生活を通して、人の素晴らしさを学んだ。誰かのがんばっている姿を見て力をもらい、誰かの笑顔を見て励まされる。私の周りにはいつも温かい人達ばかりいる。どんなときも誰かの言葉や存在に支えられてきた。だから今度は私が誰かの力になってあげたい。私にも何かできることがあるのだと思えるようになったのが、この大学生活だった。

私は太陽のような人になりたい。自分自身精一杯がんばることで輝き、それをもって周りの人に力や笑顔を与え輝かせる。これから新しい世界に飛び込み、今まで以上に上手く行かないことは多くなる。それでも私は、より多くの人に笑顔や力を与えていきたい。周りに大切な人達がいることの素晴らしさにあらためて気づかせてくれたこの４年間と、新しい世界に飛び込む機会に恵まれたことに感謝し、自分の目標に向かって自分のできることを最大限に活用し一生懸命働いていきたい。

そ、出会えた友人たちや、経験できたことでした。

４月からは、神奈川県の高等学校の国語教員として、採用していただくことになりました。何も知らずに入学しましたが、教員養成では、歴史がある大学で、きめ細かい支援が行われており、大変心強かったです。実際に試験に向けて準備をしていく中で、教師になりたいという気持ちは強くあるものの、自分が教師に向いているのかなど、悩みはつきませんでした。それでも、あきらめずに最後までがんばることが出来たのは、ゼミの加藤静子先生、友人たち、そして、家族の支えがあったからです。本当にありがとうございました。

これからは、大学で学んだことを生かし、いろいろ悩みながらも、社会人として責任を持って努力していきたいと思っています。

天竜寺にて（中古ゼミの友人たちと）

旅立つ言葉　卒業生から

卒業にあたって

社会学科４年
柏木彰子

都留へ来て４年。改めて考えると大学生活は様々な人々に支えられ、そのおかげで充実した月日を過ごすことができたと思います。

私の学生生活は地方自治論ゼミナールの活動が中心を占め、「学び」に力を入れたものでした。ゼミでは新潟県の地域自治区や秋田県の限界集落等へ足を運び「文献だけでなく現場に学ぶ」をモットーにフィールドワークに取り組み、多くのものを得ることができました。大学入学当初は文献中心の講義形式の授業を想像していましたが、高校とは異なり自分で自主的に学ぶことが要求される調査活動に面白さを感じました。問題が起こっているあるいは新しい取り組みがなされている現場に出掛け、課題を考察する調査は新鮮な驚きの連続でした。

フィールドワークでは、学生間で協力しながら、仮説の検討から宿泊先の手配までを行い、武居先生のご指導のもとゼミ生間の連帯を深めることができたのではないかと思います。中でも秋田県での現地調査は最も印象に残った経験でした。本格的に私たちの学年が主導的な役割を担った初めての調査で、限界集落といわれる地域の現状を拝見し、専攻分野である地方自治の考察を深めるきっかけをいただきました。調査関係者の皆様からの暖かいご支援をいただき、机上だけでは感じることができない人の優しさ、生き方に触れる感動を味わうことができました。自分で考え行動する積極性、自主性といったものの大切さを肌で感じた経験でした。

私はゼミでの「学び」を通して学問的な知識だけではなく、私自身を見つめる機会をいただいたと思います。中でも武居先生のご指導の影響は公私ともに大きなものだったと思っております。武居先生は一昨年急性心筋梗塞でお倒れになり、大変残念ですがご回復を心からお祈りいたします。地方自治論ゼミの指導を引き継いで下さった江波戸先生、大和田先生にも大変お世話になりました。この場をかりまして改めてお礼申し上げます。このたび卒業という節目を迎えましたが、在学生・先生方のご活躍と、社会学科のさらなる発展を願ってやみません。今後ゼミをはじめとする大学での経験・得たものを忘れず、頑張ってまいりたいと思っております。

夢を追いかけて

比較文化学科４年
佐藤なぎさ

「たまご先生、おもしろかったよ」と、留学生がかけてくれた言葉は今でも忘れられません。私は、日本語教師になりたいという思いを胸に、大学生活を過ごしてきました。日本語の先生のアシスタントをしたり、教育実習や模擬授業を行ったりして、日本語教師に必要なスキルを学びました。また、日本語教育能力検定試験にも挑戦。毎日、日本語教育に関する本を読んだり、聴解問題のためのCDを聞いたりして、２年がかりでやっと合格しました。

教育実習では、留学生対象の授業に先生のアシスタントとして参加し、授業も行いました。初めてクラス単位で日本語を教えたので、教案作成やクラスの運営の難しさを実感しました。実習後も、先生にお願いして、留学生の授業に参加したり、教壇実習を行ったりしました。教壇実習をすればするほど、改善点が多くなり、日本語教師に向いていないのではないかとあきらめそうにもなりました。しかし、日本語の授業を通して、他の国について知ることの楽しさ、日本語を教える楽しさを忘れることはできず、日本語教師になりたいという思いが強くなっていきました。

大学の外では、1年生のときから、外国人に日本語を教えたり、教科学習のサポートをする甲府市の「オアシス子どもの会」でボランティアに携わってきました。ボランテ

旅立つ言葉　修了生・専攻科から

ターニングポイントとなった1年間

文学専攻科
教育学専攻
小久江友見

私が専攻科に入ったのは、４年生の時に「今のままの自分で教師として現場に出て行くのは、あまりにも不安だ」と思ったことがきっかけでした。専攻科に進んだ先輩から「専攻科の授業は学部時代のものと違って、全部が少人数のゼミのような形式だから、より深く学べるよ。」という話も聞いていたので、教員採用試験の願書を出すのをやめて専攻科に進学することに決めました。

そして４月からの専攻科での１年間は、前期は教員採用試験の勉強、後期は研究論文と並行して授業や課題に取り組むなど、大変な面もありましたが、その分、とても充実したものでもありました。

授業では、教育に関する様々な問題や課題など、ここで学ばなければ自分では気付くことの出来なかったであろう多くのことを学ぶことが出来ました。ただ、こういったことを学ぶ授業が前期に多かったので、教員採用試験を受ける時期に、教育の世界に進むことを躊躇ったこともありました。しかし、その一方で、実践を学び自分で指導案を作ったり、様々な場面を想定して対応を考えて話し合ったり、研修旅行に行ったりと、学部生の頃よりもひとつひとつのことに深く向き合って考えることで、実際の教育現場を想像して考えることが出来るようになり、教育の可能性を再確認することも出来ました。

また、「子どもにとって本当に必要な学びとは」という思いで研究論文に取り組み、現職の渡辺恵津子先生とその実践に出会いました。授業での力量はさることながら、何よりも、渡辺先生の子どもを思う気持ち、それに対する努力が素晴らしく、問題が山積する現在の教育の現場で、こんなにも素敵な実践をしている先生がいるという事実が私に希望を与えてくれました。

専攻科　楽山での誕生会

私などは、まだまだ勉強不足で、知らないことが沢山あります。それでも、不安が完全に消えたわけではありませんが、4月から教育現場へと出ていく覚悟が出来ました。これは、専攻科で学んだからこそであり、この１年間は私にとって大きなターニングポイントとなりました。教員採用試験にも合格し、本当に大変なのはこれからです。しかし、暮らしやすいとは言い難い今の世の中で、子どもたちも、大人たちも、そして勿論自分も、皆が幸せになれるような教育をしていけるよう、努力していきます。

最後になりましたが、今の私があるのは、この１年お世話になった先生方、専攻科の仲間、家族、その他大勢の方々のお陰であり、深く感謝しています。本当にありがとうございました。

ィア活動を通して、国や年齢、職業の違う人に出会い、さまざまなことを学んだだけでなく、外国人の子どもの教育に関する卒業論文を書くきっかけにもなりました。

5月からは、国際交流基金の若手日本語教師派遣事業により、タイで日本語教師を務めます。ここまであきらめずにやってこられたのも、日本語の先生をはじめ、たくさんの人の支えがあったからです。本当に感謝という言葉だけでは言い表せません。これからも人との出会いを大切にし、終わりなきゴールに向かって歩んでいきたいと思います。これまで支えて下さった皆さん、本当にありがとうございました。

富士急ハイランドに一緒に行った
オアシス子ども会のメンバーたち

旅立つ言葉　大学院修了生から

感謝、感謝、感謝……。

国文学専攻
望月一仁

この度大学院の二年の課程を修了することになりましたが、現職教師である私を受け入れるに当たり、様々な御配慮を頂いた本学関係者の皆様方に感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

指導教官の佐藤先生には迷惑ばかりかけてしまいました。適切な助言を頂いたにも関わらず、研究テーマが決まるまでに一年近くを要したために、二年目になっても、仕事との両立もあり、修士論文の作成は遅々として進まず、最後まで心配をかけてしまいました。しかし、粘り強く指導して頂いたことに心より感謝申し上げます。

高橋先生には学部生時代（の指導教官だったので）からお世話になっていますが、本大学院受験から始まり、この二年間も大変お世話になりました。修論の中間発表会の時にかけて頂いた労いの言葉は一生忘れません。先生の授業のレジュメは学部生の時よりも気合いを入れて作りました（笑）。ありがとうございました。

加藤先生や牛山先生は、教育現場の大変さを慮って話しかけて下さるので、ざっくばらんに相談を持ちかけたこともありましたが、その度に親身になって聞いて頂きました。

阿毛先生（の人柄もあってか）と院生仲間と一緒になって、中原中也について語り合った時間は、本当に楽しく貴重な体験となりました。中也に入れ込んだ一年目でした……。

田中孝彦先生や西本先生には、生意気なことも言いましたが、優しく包み込んで下さいました。先生方のおかげで教育現場を客観的に見ることが出来るようになり、高校に戻った二年目の実践に、その経験が生かされています。

楠元先生や寺門先生の授業には、教養・見識の高さ、博識ぶりが滲み出ているので、一言も聞き漏らすまいと思っていました。授業で紹介された本を読んだり、近世のことを学んだりしたことが、実は中世の勉強に一番生かされていたことに今改めて気付いています。

そして、色々助けてくれた院生仲間にも感謝の気持ちを表し、この稿を閉じたいと思います（次数に限りがあるので、感謝の気持ちは言い尽くせません……）。

本当にありがとうございました。

卒業に際して

英語英米文学専攻
髙瀬裕美

「高速バスを降りると、そこは雪国だった」じゃあ文学性ないなぁ、やっぱり「トンネル」だよなぁ、などと現実逃避しながら初めて都留に足をつけたのは、もう６年前のことである。４月に雪が積もるなんて。それはいまだに忘れられない程の衝撃だった。

６年を振り返って思うのは、とにかくよく喋ったということである。自分でも吃驚するぐらい、喋りに喋った。対話はとかく凝り固まりがちな思考を攪拌し、自分自身とそのぐるりに対する認識を立体的にしてくれる。とりとめもない雑談がもっと大きな問いと繋がっていた、なんてことはざらにある。アポリアにはまっているときこそ、外に対する感覚は開いておきたい。そう考えるようになったのは大学で出会った変な人々（褒め言葉である）の影響だろう。本当に豊かな学生生活だったと思う。

学部・院と続けてE.M.Forsterの作品と向き合い、なぜ自分は彼の作品に惹かれるのか、学問／研究とはどういうことなのか、そもそも自分にとって文学とは何なのかといった問題に直面した。ど

旅立つ言葉　大学院修了生から

まちづくりの困難さと手ごたえを知って

社会学地域社会研究専攻
中嶋　智

学部での４年間、大学院での２年間という計６年の月日の流れは、あまりに速いものでした。私の６年間にわたる学生生活は常に「まちづくり」への関心と共にあり、夢中で追究してきた地域社会研究は、なにより私自身のやりがいであったと感じています。

とはいえ、平成19年に学部の卒業を間近にした私にとって、大学院への入学の決意は、必ずしも、計画的なものであったとはいえません。

学部で卒論を書く段階では、私はフィールドワークに依拠するよりも、「まちづくり」とその関連概念に興味を抱き、勉強を進めてきました。そして、卒業論文を通じて自分の学習成果がひとつの形になったとき、達成感を持つ一方で、燃焼しきれない思いも込み上げてきました。私の場合、最終的な研究目的は、もっぱら自らの故郷（長野県小海町）をどうしていくか、ということにありましたが、卒業論文では、故郷の実状やその中で地域おこしに奮闘する人々の思い、そして、私自身の思いを十分には表しきれてはいませんでした。そういった不完全燃焼の思いを抱いた末、私は大学院進学を目指し、故郷の現場をもっと直接的に扱った形で研究を深めていきたいと思ったのです。

そのような経緯で大学院社会学地域社会研究専攻へ進学し、２年間かけて故郷の現状を見つめてきました。私は大学院での研究を通じて、様々なことについて考えるきっかけをもらいました。まず、私にとってまちづくりへの関心の根幹は、他ならぬ郷土愛であり、これから生涯にわたって、地域を支える一人として故郷の環境や文化を守りたいと強く思うようになりました。また、「働く」ことについても、必ずしも短期的な見返りを期待するものでなく、無償で何かを成し遂げていくことの意義を学びました。

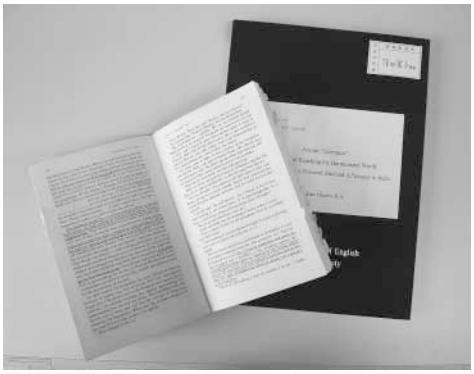
そして、まちの現状をみつめ、そのまちと共に歩んでいこうとする人々の思いや成果は、「研究」として活字で表現しきれるような整理されたものではなく、もっと泥臭くて、ゆっくりと、苦悩と葛藤と漸進と喜びが複雑に交差するなかで形を成していくものだということ、そのために人々が日々奮闘しているということを痛感しました。

「豊かなまちをつくりたい」という思いや実践が、一筋縄では進まないものであることを実感した私は、それでもなおその「まちづくり」に対してやりがいを感じています。私の学生・院生生活は、長期的・継続的に地域とどうかかわっていくべきか、そのおもしろさと難しさを教えてくれ、その意味で大きな価値を提供してくれた６年間だったと思います。

れも非常に手強い問いである。とりあえず今掴んでいるのは、これらの問いが「生きる」ことに通じているということだ。

私にとって「生きる」とは、心が外の世界と境界を緩やかにしながら繋がっている状態のことだ。心の中に、常にsensationがあることだ。Forsterの『ハワーズ・エンド』には「ただ結びつけよ！」とあり、また然る方は「学問とは学科の壁を越えひろく呼吸してゆくこと」と言った。これらの言葉に、私は目を洗われるような心地がした。分断された様々な事象、その一つひとつを繋いでいくのが学問であり、人生だとしたら。物事の間にパイプを築くとき、そこにはsensationがある。対話に堪らない愉悦を覚えるのはそのせいだろう。研究も然り。だから自分が生きている限り探究は続くのだ。

私は卒業に際してようやく、トンネルの入り口に立っている。



Forsterの小説と修士論文

旅立つ言葉　大学院修了生から

旅立つ言葉

比較文化専攻
朴　桂仙

都留にきてもうすぐ６年の月日が経つ。卒業を目の前にし、文大での日々を振り返ると、さまざまな思い出が浮かんでくる。

私は比較文化学科に所属し、学部在学時には中日韓３ヶ国のNPOについて勉強した。そして、大学院に進学してからは在韓華僑・華人の歴史と現在について研究を進めてきた。

在韓華僑・華人は、韓国社会において唯一のマイノリティーとして存在している。その歴史は非常に複雑であり、けっして平坦ではなかった。現在、在韓華僑・華人の社会的地位はある程度向上してきているが、韓国社会においてはいまだにその認識度が低く、そして在韓華僑・華人自身も祖国でない第三国で生きるために、一生懸命努力している。

私自身も同様に、国を離れて日本にきている。文大では、外国人留学生として勉強しており、ある意味マイノリティーともいえる。しかし、マイノリティーであるからこそ、周囲の人々とのコミュニケーションが非常に重要である。現在、日本には華僑・華人をはじめ、在日韓国人・朝鮮人、そしてさまざまな目的で日本にやってくる外国人がおり、日本国内のマイノリティーとみなすことができる。そして、皆が共存するためには、相互理解と異文化コミュニケーションが不可欠であり、きわめて重要な要素となっている。このことは国と国との間にも当てはめることができると考えられる。

文大での６年間、諸先生や周囲の方々のおかげで、改めて相互理解と異文化コミュニケーションの大切さがわかった。卒業後、外国人と関わる仕事に就くことになり、文大で学んだことを忘れずに、努力したいと思う。

最後に、指導教授である笠原先生をはじめ、諸先生ならびに職員の方々に感謝の言葉を申し上げたい。

サハリンでの比較文化フィールドワーク（笠原先生担当）

現場で生きる学び

臨床教育実践学専攻
小俣貴美

これまで中学校教員として教育現場で、子どもや親が抱えるさまざまな困難に出会ってきました。とくに特別支援学級の担任だった４年間には，困難を抱えるなかで進路に悩む子どもや親の姿を見てきました。そのような状況に直面しながらも何もできない自分にもどかしさを感じる日々がありました。このままでいいのだろうか、いやこのままではいけない。このような思いから、山梨県教育委員会の内地留学生として大学院で学ばせていただくことになりました。

久しぶりの学生生活はとまどいながらのスタートでした。本に真剣に向かう学生の姿にあせりを感じたことを思い出します。これほどまで真剣に、そして問題意識を持ちながら本を読み進めていたことはあっただろうかと反省しました。ゼミで意見交換し自分の考えを深めていくことで、これまでにはなかった新たな考えを持ったり新たなものの見方をしたりすることができ、このような学びができたことにとても感動しました。

２年目は現場と大学院との両立に不安を感じることもありましたが、学んだこと考えたことの多くが現場ですぐに生きてくることを実感し、充

旅立つ言葉　大学院修了生から

実した１年間となりました。私の目の前にいる子どもたちはとても素直で前向きに頑張っています。しかし、そのような子どもたちでも心の中には多くの悩みを抱えていて、それを表に出せず一人で苦しんでいる子どももいます。これまではその苦しみに目を向けてあげることができませんでしたが、この１年間はふとしたしぐさや言葉のなかから子どもの声を聴き取ろうとしてきました。しかし、それは簡単なことではなく、子どもの声を聴くことの難しさを感じた１年間でもありました。今後も大学院で学び考えたことを大切にし、実践を積み重ねていきたいと思います。

教官や仲間に支えながら多くのことを学び、そして深く考えることのできた２年間だったように思います。ありがとうございました。

平成20年度　卒業者・修了者予定数

■文学部

初等教育学科……195名
国文学科……114名
英文学科……117名
社会学科……110名
比較文化学科……112名

■専攻科　文学専攻科

教育学専攻 ……10名

■大学院　文学研究科

国文学専攻 ……３名
英語英米文学専攻 ……１名
社会学地域社会研究専攻 …２名
比較文化専攻 ……３名
臨床教育実践学専攻 ……３名

平成21年度　入学試験状況

（平成21年3月1日現在）

平成21年度　推薦入学試験状況

学　科　名		受験者数	合格者数
初等教育学科		224	107
初等教育学科（芸術体育系・自然環境科学系）		32	19
国文学科		179	66
英文学科		127	66
社会学科		155	85
内訳	現代社会専攻	108	54
	環境・コミュニティ創造専攻	47	31
社会学科環境・コミュニティ創造専攻（活動評価型推薦）		22	12
比較文化学科		101	62

平成21年度　編入学試験の状況

学 科 名	受験者数	合格者数
初等教育学科	20	11
国文学科	9	6
英文学科	19	10
社会学科	16	9
比較文化学科	15	8

平成21年度　前期日程入学試験状況

学　科　名		受験者数	合格者数
初等教育学科		92	32
国文学科		143	72
英文学科		120	78
社会学科	現代社会専攻	36	27
	環境・コミュニティ創造専攻	23	13
比較文化学科		63	42

平成21年度　中期日程入学試験状況

学　科　名		志願者数
初等教育学科		828
国文学科		733
英文学科		668
社会学科	現代社会専攻	298
	環境・コミュニティ創造専攻	189
比較文化学科		531

卒業論文・研究論文・修士論文一覧

学部卒業生、文学専攻科、大学院研究科修了生の卒業論文、研究論文、修士論文の全タイトルを掲載する。今回掲載したのは、今年度に提出された卒業論文等であり（前期卒業・修了も含む）、実際の卒業者・修了者とは異なる場合がある。

初等教育学科

麻場一徳ゼミ

岩間啓介　ラグビーにおける「スクリューキック」の動作分析

河原加奈　朝食摂取の有無が運動に及ぼす影響　―血糖値を中心として―

北村有里沙　競技スポーツの継続に関する研究

熊谷勇一　投動作「ボール投げ」に関する分析研究　―昔の遊びが投動作の発達にあたえる影響―

倉持　淳　バドミントン・オーバーヘッドストロークの動作分析　―初心者指導に活かすために―

三枝由里絵　山梨県における高校スポーツの意識・活動に関する研究

鈴木はるか　小学校体育における陸上運動指導について

友野知恵　保護者の子どもの運動遊びに対する意識や関わり方について

山手大輔　古武術、武道を使ったスポーツトレーニング法に関する研究

金川己乃美　特別支援教育における体ほぐしの運動　―ムーブメント教育から考える―

関谷美南　バスケットボールの審判員に求められる能力　―選手の立場から考える―

湯田坂綾　跳び箱運動「開脚跳び」―動きの系統に関する分析的研究―

池田充裕ゼミ

庄子ひろみ　子どもの心の病に関する一考察

関口佳祐　叱ることの意義　―子どもの成長における可能性を考える

高木泰知　学力の本質を問う　―フィンランドの教育、フレネ教育を通して、日本の教育を考える―

高見　滋　構成的エンカウンター理論と実践

鳥原哲也　平和教育の意義とその実践

中村晴佳　国際理解教育のための歴史教育　―韓国・ベトナムの歴史教科書から学ぶ―

植村憲治ゼミ

新井淑水　算数・数学教育の変遷について

都築麻理奈　日本の算数教育の問題点と課題

若松由佳　日本の算数教育が抱える課題　―日本とアメリカの算数教科書比較から―

今田佳央　歴史背景から見た現代における算数教育の意義の検討

春日作太郎ゼミ

伊藤美波　「夢フォーカシング」を導入したグループワークによる大学生の不安の変容

稲田　悟　「死生観」をテーマとした構成的エンカウンター・グループによる大学生の人生観の変容

原口愛海　描画法を中心とする表現療法を用いたグループワークによる大学生の気づきと変容。

河村茂雄ゼミ

遠田将大　無気力感と自尊感情による４群比較、アパシーと抑うつ質的差異について　―達成動機、成功恐怖、友人関係との関連から―

大場真美　大学生がもつ親和動機バランスに与える影響についての一考察

金子功一　自己価値の随伴性が対人関係に及ぼす影響について　―セルフ・モニタリング、対人ストレスイベント、対人ストレスコーピングの観点から―

菊地紋子　大学生における過剰適応が友人関係に及ぼす影響　―ストレス反応、不合理な信念、ソーシャルスキルとの関連―

黒澤文菜　友人関係のとり方による理想と現実のズレが個人に及ぼす影響　―心理的ストレス反応、親和動機、対人ストレスコーピングとの関連から―

後藤幸子　対人関係における相互協調性・相互独立性についての一考察　―親和動機、性格特性、自尊感情の観点から―

佐野好美　自己受容・他者受容が友人関係における被援助志向性に及ぼす影響　―対人ストレスコーピング、ストレス反応の関連から―

真壁梨絵　青年期における対人恐怖的心性がストレス対処方略に及ぼす影響について　―自尊感情、特性的自己効力感、過剰適応との関連から―

若林智子　内的作業モデルが青年期の対人関係に与える影響　―友人関係、セルフモニタリングの観点から―

鍬守信彦ゼミ

酒井博康　ドーピングと道具の発達におけるスポーツ観について

高塚　淳　都留文科大学運動部員の性格についての調査　―YG性格検査を通して―

山入端秀章　沖縄の伝統芸能についての研究　―エイサーを授業に取り入れるために―

後藤道夫ゼミ

江村奈美　労働・職業訓練と東京建築カレッジ

柏　芙美　農村の地域再生　―地域内再投資力

片桐真美　母子家庭にみる子どもの貧困

神谷沙希　消費文化の子どもたちへの影響　―ケータイコミュニケーション

木村裕一　ニューメディアとコミュニケーション　―若者の対人関係とニューメディア

桑原啓祐　子供の貧困　―高校授業料問題

卒業論文一覧・初等教育学科

佐久間彩　保育の多様化　―保育政策からこれからの保育を考える
花形香織　男女の賃金格差
南　里沙　子どもが育つ条件　―母親の就労と子育て
森下陽介　日本の農業と農業保護政策　―経営安定対策の行方
芳沢将吾　人材派遣の歴史と問題点
米倉瑶子　「ニート」　―イギリスの事例を参考にして

小林重章ゼミ
芦沢早香　学級づくりについて　―子ども・保護者・教師をつなぐ学級だより―
大島優香　発達障害児とともにつくる学級
栗原　誠　教材の核と授業展開の核
田後洋平　子どもの成長と体育の教育的意義
田中　萌　学級崩壊について

坂田有紀子ゼミ
佐々木聖仁・出野浩平・古川峰央
横田尚子　都留市における“カワラナデシコ”保全の為の基礎的研究
岡田　淳・甲斐美帆・小林由季・永坂優真　カジカの菅野川流域における分布とその住みよい河川環境　―カジカが戻ってくる川を目指して―

佐藤　隆ゼミ
橋本歩美　授業における楽しさの質とそれらが子どもに与える影響
多田美恵　学級集団を育てる　―「共感」を軸として―
志村阿希奈　一斉授業での「待つ」という学習支援のありかたとは
天野絵梨香　教師と保護者のつながり　―らぶれたあを通して―
岩本功平　教師と保護者の共同により拡がる可能性
阿倍紫音　品川区「市民科」からみる日本のシティズンシップ教育の考察
村澤健博　今、教師にゆとりはあるのか？
大平圭亮　現代社会を生きる子どもたちが求めるもの

清水雅彦ゼミ
栄　翌　個人向けのサウンド・スケープ
大浦真紀　フレデリック・フランク・ショパン　―音楽と民俗性―
笠原美幸　生きる力を育む音楽科の授業の研究
北川美佐子　W.A.Mozart　―なぜ多くの人に親しまれるのか―
郡司美子　音楽が運ぶ幸せ
小林由佳　幼保・小の連続性の中での音楽
小宮山弘子　ヨハネス・ブラームス　―ピアノ・ソナタ３番に焦点をあてて―
佐藤麻理　モーリス・ラヴェル　―その生涯と作品は人々にどのような影響を与えたのか―
曽雌由香　小学校における学校生活と合唱指導　―感動ある合唱体験を目指して―
高山真由美　音楽と人間性　―音楽と人との関わり―
春名　瞳　音楽が人間に与える力
望月芙由美　音楽教育の展望　―日本とアメリカを比較して―
山崎美沙　消えゆく時代を語る音楽　―未来へ伝えたい童謡・唱歌―
山田晃大　ジョルジュ・サンドとの出会いによって生まれたショパンの傑作

添田慶子ゼミ
児島裕一　ブレイクダンスのウインドミルに関する分析研究
栗田沙織　乳児の発達と笑いに関する研究
船木　愛　都留文科大学女子学生のスポーツ活動意識に関する研究
山口大知　ボールリフティングのトレーニング方法の違いが学習効果に及ぼす影響について
吉村美紀　都留文科大学生の食意識について

高田理孝ゼミ
上原　歩　きょうだいかんにおける性格の違いについて
神谷　彰　中学生における心理的時間とその時間評価
小林亮介　大学生におけるライフイベントと対処方略
市村雄樹・鳥居潤一　大学生の自伝的記憶に関する一考察
名畑康之　事後情報効果による記憶の変容

竹下勝雄ゼミ
中野亜由未　美術教育における表現アートセラピーの可能性
八桁　健　初等教育における図画工作科についての一考察　―青森市立小柳小学校の実践例を通して―
長友彩香　錯視が感覚に与える影響と、その可能性の一考察
高柳周子　描画活動の持つ意味と可能性
清水健吾　小学校における色彩教育についての一考察　―教育実践の調査を通して―
久喜奈美　仕掛け絵本のデザインの力　―読み手によって創られる対話性とは―
柏木一輝　点描の視覚効果の一考察
一瀬　悠　教育における描画素材の可能性　―鉛筆の現状と課題―

田中孝彦ゼミ
片山尚亮　ある母子生活支援施設（母子寮）職員の思想形成の記録
坂本晴美　病いの受容と家族の絆
白岩　遥　教師が教師であり続けるために
高島綾子　クリニクラウンの子ども観
武藤未希　教育に笑いを
大島翔太　ネットいじめを通して真に必要な情報教育を考える

筒井潤子ゼミ
新井かな代　「死」と向き合うこと　―子どもにとっての親との死別体験―
岡崎祐子　特別支援学級の必要性とその取り組み　―ケース研究―
岡野　藍　ストレス社会で自分らしく生きる
垣花　瞳　支援が必要な子ども達を包み込む教育　―島の特別支援学校の現状や取り組みから―
小林裕直　「痛み」が人にもたらすもの
中澤洋平　子どもとの距離感
二ノ宮翔平　人と人との人間関係
野手雄介　教職員間コミュニケーションの重要性
前田　心　いろいろな子ども理解　―私の感性を深める―
森田浩紀　悩みと関わるために

卒業論文一覧・初等教育学科

鶴田清司ゼミ

岡　智洋　敬語習得の傾向とその指導法の研究

熊谷拓郎　伝え合う力を育てる国語科教育　―ことば遊びを使った語彙力の育成―

栗山慶子　学習ゲームを取り入れた国語科授業の研究　―「勉強嫌い」をなくすために―

佐藤仁美　絵を読む力を身につける指導法の研究　―絵本の絵を読もう―

里森史崇　作文をおもしろいと感じる授業とは　―国語嫌いの子どもを減らすために―

塩入友美奈　「伝統的な言語文化」に親しむ態度を育てる国語教育の研究　―地域の伝統を国語科に生かす―

新留亜矢　話し言葉教育の可能性　―郷土の言語文化のおもしろさを生かして―

関澤　唯　実践的な「書く力」を身につける国語教育の研究　―メールやブログを活用して誰かに思いを伝える力を身につけよう―

三塚　慶　国語教育におけるコミュニケーション能力の育成　―笑顔が溢れる会話のために―

村松教寛　日本語の乱れと国語教育　―日本語は乱れてしまったか―

寺川宏之ゼミ

有馬壽眞　関数の指導法

石川芽里　円周率の歴史

宮下美咲　面積図をもとに学ぶ計算

宮本樹里　分数における教育的課題について

山梨由加里　初等教育における算数教育　―小数のわり算―

河本文香　国際的な学力テストからみた日本の学力

面川怜花　数学史の観点から見た算数科教育　―小学校算数と中学数学の連携―

鳥原正敏ゼミ

佐野朱美　美術で育む創造力

藤原慎平　今日の図画工作科に対する一視点　―図画工作嫌いから考える授業の可能性―

新本恵梨子　生活の中のものづくり、楽しむ心　―図画工作の授業を通して学ぶ―

前島彬人　今日求められる教師像とは　―美術教育を通しての一考察―

高橋伸弥　美術教育の可能性　―図画工作科が子供の心を照らす―

豊野　貢　美術教育における一考察　―鑑賞教育は必要か―

渡邉智代路　美術の特性を生かし、子供を伸ばし理解するには　―佐藤マチ子先生の実践を通して―

中井　均ゼミ

坂本祐輝・田澤 優太・大川原伸　山梨県郡内の鉱山について

下山貴恵・谷口未央　沖縄県宮古島の海岸砂の研究

菅野瑞保　相模川（桂川）の川砂の研究

柴田尚美　富士山及び、周辺地域の地震活動に関する研究

西本勝美ゼミ

舞田雄大　たくましく生きていくために　―子どもの地域活動への参画を通して―

川田泰之　子どもと共に創る授業とは　―総合学習の観点から―

佐伯啓史　障害児と健常児が共に学ぶことの意義　―通常学級における諸実践の検討を通して―

浜田悠次　「新しい働き方」へのアプローチ　―若者と仕事をめぐる変化―

箱石泰和ゼミ

小山利博　授業における発問の重要性と法則化運動の是非

竹内寛明　「総合的な学習時間」の考察　―教科としての特性と実践としての可能性―

辰馬基倫　受験勉強＝悪玉論の検討　―外発的動機づけ『受験勉強』の是非―

深澤光雄　「学級崩壊」のメカニズムを探る

藤本　恵ゼミ

会田浩平　浦沢直樹の描く恐怖

石間佳乃　〈セカチュー〉にみるベストセラー作品と社会

大野芽衣子　恩田陸作品に見る〈学校〉の姿

齋尾瑠梨子　幼年童話と子どもの読書

篠澤隆樹　漫画の中の方言

山下里美　詩教材の研究　―工藤直子作品の教材化―

森　博俊ゼミ

小林由香　老人と子どもの関係が生成する価値

迫頭美紗　人の多様性への寛容さ　―「べてるの家」の生き方の検討を通して―

佐藤智美　障害児を持つ「困難」とそれを乗りこえる「力」

下端小百合　居場所について考える

中原洋彦　障害児の親の生きづらさと受容

本間由未子　「居場所」としての学級づくり　―９０年代以後の『生活指導』『教育』の検討を通して―

星野幸子　「他者の痛み」を理解するとは　―Ａ.クラインマン『病いの語り－慢性の病いをめぐる臨床人類学－』の検討を通して―

望月千穂　書くことの意味と自分のとらえ直し　―ある司書教諭による作文指導の検討を通して―

柳　宏ゼミ

伊牟田健人　運動部活動の公式戦における動機付けの研究

沖田　翼　都留文科大学大学生の運動者行動に関する研究　―逃避行動に着目して―

長田　梓　バスケットボールのプレイ中における心拍数に関する研究

清水真琴　バレーボールのスパイク動作に関する分析研究　―フォームに着目して―

高橋美穂　双葉地区の連携型中高一貫教育について

遠山佳吾　児童の生活習慣及び体育に関する実態調査　―都市部と農村部との比較―

福嶋一希　経営資源からみた独立リーグに関する研究　―ベースボール・チャレンジ・リーグについて―

卒業論文一覧・初等教育学科

山崎豪介　ハンドボールにおけるジャンプシュートの動作に関する分析研究　―ゴールキーパーに読まれにくいシュートについて―
安倉由佳　小学校高学年のための学校行事について　―野外活動から得られる効果―
進藤五矢香　学校教育における体育意義についての考察　―からだに着目して―
山中瑤子　「側方倒立回転」の習得過程の動作に関する分析研究

山本安夫ゼミ
井上雄貴・猪熊亮佑・滝沢翔太・竹田恭朗　自由落下と放物運動の実験と観察
赤木香織・上原夏美　太陽エネルギーの観測と利用
小澤麻弥・市川結美子　紫外線についての研究と太陽光の利用

山森美穂ゼミ
奥　章徳・籠島貴文・城ヶ谷直輝　オゾンゾンデによる都留の光化学オキシダント測定
寺島正樹　小学校課程の燃焼分野における効果的な授業と実験
本間嘉明　児童に興味・関心を持たせる化学実験（水溶液）　―理科離れの現状と対策について―

吉住典子ゼミ
輦　美玲　災害時に使用する携帯浄水器の研究
石塚健一　ことばかけとストレスの相互作用について
金子綱基　生活習慣病について　―糖尿病
赤池麻希　生活習慣病について　―健常者
若葉和秀　食育について　―減塩食から見る子供たちへの取組み
伊藤　真　「ケータイ」リテラシーと中高生
花本麻衣　食育推進の研究
大石恵里奈　被服の機能性に関する研究
湯澤美貴　ことばかけとストレスの相互作用　―ことばかけと感情

卒業論文一覧・国文学科

国文学科

上代文学（鈴木武晴ゼミ）
熊谷直也　山口女王の方法
本井洋平　古代人の酒
薄井彩加　万葉集の「ひとり」の歌
内田悠香　『万葉集』の藤を詠む歌
岡田絵里菜　嘆きの文学
小池澄香　万葉の月と人
大同順子　古事記の異類婚姻譚
千葉あゆ美　草なぎの大刀の役割
長谷川涼香　夢の世界とその受容
藤本陽子　いにしえびとと太陽
松本千絵　しなざかる越
山田のぞみ　古事記の世界観

中古文学（加藤静子ゼミ）
阿部良子　『源氏物語』の惟光
井出由起子　『うつほ物語』における贈与の諸相　―饗宴の場における贈与の表現―
遠藤朱美　宇治の世界　―薫・中の君から見た亡き大君―
小松麻奈加　歌ことばの表現史　―「蛍」と「朝顔」―
今野麻衣子　『浮舟物語』考
清水麻美　『源氏物語』の女性たち　―若さを表す形容語彙から―
白濱　桜　平安物語における懐妊表現
松岡亜紗　『源氏物語』の香り
水嶋紗弥香　『とりかへばや物語』における『源氏物語』の受容
柳澤みの里　『落窪物語』考
渡辺まり奈　『とりかへばや物語』の人物描写

中世文学（佐藤明浩ゼミ）
廣長東詩子　『都のつと』考
和泉友紀　藤原定家『熊野行幸日記』における歌会からみる熊野
杉浦亜依子　『むぐらの宿』における人物像
鈴木由紀　『しのびね物語』論
平井里佳　『義経記』の表現
洞内恵理　道成寺説話考　―『今昔物語集』『大日本国法華経験記』を中心に―

近世文学（楠元六男ゼミ）
内田友紀　魔除けの桃について
勝田裕城　古事記の注釈
門脇裕姫恵　刺青の諸相
北野絵莉　『鉢木』考
千野綾可　『嵐は無常物語』考

近代文学（阿毛久芳ゼミ）
小池朝香　金子光晴論
泉川浩美　高橋新吉論
井田貴文　北杜夫　―初期短篇・昭和三十年代を中心に―
木村桃子　中川李枝子論　―詞と絵との交響―
佐藤詳子　『赤糸で縫いとじられた物語』からみる寺山修司論
多賀千裕　小川未明『薔薇と巫女』論
谷口和佳奈　小野町子の旅と終点　―『第七官界彷徨』論―
津田まりの　金子みすゞ論　―金子みすゞの魅力について―
土屋燈里　中原中也論　―その詩の魅力―
西畑菜津子　太宰治『お伽草紙』論　―背景から読み解く―
原田瑶子　江國香織『落下する夕方』論
堀尾翔太　梨木香歩『からくりからくさ』論
吉川枝理　国木田独歩『酒中日記』論

近代文学（新保祐司ゼミ）
浅野智美　『沈黙』論　―遠藤周作が描くイエス・キリスト―
磯部綾佳　野上弥生子『秀吉と利休』論　―生き方の問題―
押田彩帆　『痴人の愛』　―その痴人性―
川上千尋　樋口一葉論　―一葉日記を通して見るその生き方―
黒木美和子　林芙美子論　―女という性を生きる―
島川克也　国木田独歩　―共時的ジャンル研究の試み―
北村　梓　小説家小川未明論　―未明のロマンチシズムとその本質について―

卒業論文一覧・国文学科

田畑智聖　森茉莉論　―硝子の中の「比類なき少女」に関する一考察―
常石麻美　芥川龍之介の遺書　―『或阿呆の一生』を中心に―
宮崎　葵　「歩く詩人」のダダイズム　―中原中也論―
大下圭介　福永武彦論

近代文学（田中　実ゼミ）
有川　香　『山月記』論　―語りからよむ変身―
阿部周平　心のない世界で　―村上春樹『ダンス・ダンス・ダンス』の作品論
高野勇人　グスコーブドリの伝記考　―ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記と比較して―
石坂佳久　『よだかの星』論　―よだかの最後について―
伊藤麻衣子　村上春樹『世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド』論
中尾玲子　太宰治『皮膚と心』　―「私」語り・見えない「心」・見られる「肉体」―
深澤麻里　『オツベルと象』論　―「白象のさびしいわらい」への追求―
藤巻　歩　『春琴抄』私論
村上琴美　国語教育における文学教材の読み　―川上弘美作品を通して―
晴山生菜　谷崎潤一郎『人魚の嘆き』論　―一瞬の中の永遠と絶対―

近代文学（古川裕佳ゼミ）
伊東愛加　山田詠美論　―初期作品を中心に―
上蓑佳代　中島敦『悟浄出世』論
大岡千晶　松尾スズキ『まとまったお金の唄』論
金子美香　『銀河鉄道の夜』論
菊田夏子　川端康成『みづうみ』論　―母という夢・母性を求める彷徨からの目覚め―
齋藤美喜　崩壊する「壁」　―安部公房『壁』論―
佐久間絢子　谷崎潤一郎『異端者の悲しみ』論　―「成功」の物語―
玉木清野　安部公房『箱男』論
三塚ちひろ　川端康成『伊豆の踊子』論　―孤児根性から脱却できなかった〈私〉の物語―
福井遥香　壺井栄『二十四の瞳』論

国語学古代語（髙橋宏幸ゼミ）
大橋菜央　類義動詞の消長について　―「まどふ」と「まよふ」―
武内遥香　用法による意味の変遷について　―「わぶ」及びその派生―
田中結佳　接頭語への変遷について
冷清水友絵　上代から中世にかけての感動詞について　―母音を中心に―
堀　智恵　心情語彙の研究　―「うらやまし」を中心に―

国語学近代語（樋渡　登ゼミ）
峯森一浩　中国現代文学の日本語訳に見られる表現方法論的考察　―敬語を中心に―
安間哉子　宮崎駿監督映画作品における役割語の考察
大杉　薫　名詞から代名詞へ　―近世期における「おまへ」「てまへ」を中心に―
佐藤千秋　日本語訳「ハリー・ポッター」における役割語について　―原文との比較を通して―
佐藤有紀　禅語「挨拶」の語誌
中川裕文　自筆『三河物語』における用字法の考察
野路紗織　江戸時代における原因・理由を表す接続助辞「サカイ」について　―使用者を中心に―
宮本智加　現代表記に見られる異例の濁点表示について
森　道子　現代国語辞書における意味記述語彙について
矢澤由衣　洒落本の会話文中に見られる語彙種の考察

漢文学（寺門日出男ゼミ）
井原那津美　『資治通鑑』の歴史観
石川創太　白居易詩研究
河原亜希　石川丈山の『覆醤集』について
小林野乃美　中井履軒『大学雑議』研究
杉本恵理　荻生徂徠の『讀荀子』について
松本吉尊　三輪執斎『標註伝習録』について
横山恒司　曹操詩研究

国語教育学（牛山　恵ゼミ）
松井久典　1960年代現代における子どもの作文の違い
伊藤綱洋　漢字の指導について　―漢字の成り立ちや意味を取り入れた具体的な指導―
齋藤公子　小学校国語科における子どもの表現力を育む読書指導　―学習指導要領に重点を置いて―
三田和樹　言語環境と子どもの学習効果
清水陽子　『ペンネンネンネンネン・ネネムの伝記』と『グスコーブドリの伝記』の対比
高橋亜由美　児童文学における残酷性とそのあり方　―向山貴彦・宮山香織『童話物語』を中心として―
豊川沙衣子　児童文学に描かれた子どもの空想
野々山萌　寺子屋における国語教育
藤田あゆみ　児童文学における推理小説について
細井真由美　中学校国語科における詩の指導法
三浦　茜　児童文学におけるクマのキャラクター性について
山口紘平　明治期の国語教科書の研究　―制度・制作を中心として―
遊佐　恵　説明文教材（小学校）における論理の指導　―「事実」と「筆者の考え」に着目して―
渡部ひとみ　小学校国語科における「書くこと」の教育について　―平成十六年検定済教科書における「書くこと」の教材を中心として―

情報・文化（稲岡　勝ゼミ）
小笠原昇平　インドネシア独立に尽力した日本人兵士たち
加藤剛大　大衆文学における清河八郎像の比較と研究
小林明子　「魔女の宅急便」からみる少女の自立
昆　佑美　小泉八雲の『怪談』　―日本文化が外国人に与える影響―
佐々木章太　郷里の作曲家古関裕而について
田中瑞紀　蛇婿との異類婚姻譚
吉川充美　九星と十二支から見る五黄の寅
宇内恵子　起き上がり小法師の歴史と変容　―信仰的玩具から観光土産へ―

卒業論文一覧・英文学科

英文学科
文学・文化演習

冨樫　剛ゼミ

唐澤みさ子　英国王室におけるダイアナ妃とその生涯
鶴田　彩　イアン・マキューアン『贖罪』における植物の表象
大貫康隆　英国の魔女裁判　―魔女裁判と免罪符
栗原珠美　初期近代イギリスの結婚と家族
杉田利沙　『お気に召すまま』に見るイギリス文学における同性愛とキリスト教の関係
田之脇理紗　イギリスにおける妖精像とシェイクスピア
冨里理恵　初期近代イギリスジェンダー論　―女優の誕生と女性の社会的地位の変化
長谷川千明　変わりゆく怪物たち―初期近代イギリス文学にみる異端者
前田光希　ヴィクトリア朝の貧困・犯罪　―ディケンズの『オリヴァ・ツイスト』と『大いなる遺産』について
峰　玲奈　シェイクスピアの作品に見る結婚と恋愛と女性
望月麻衣　Witchcraft　―初期近代イギリスの魔女と魔術師

大平栄子ゼミ

岡田哲平　魔女の表象の変化
小田和夏美　グラミン銀行の功績―貧困と女性
高野麻美　ジェンダーからみるディズニー
青木　梢　*Maurice*研究　―同性愛を知るために
新井貴博　文学・文化テキストにみる蛇の表象
上野　瞳　インドの女性と結婚―変貌の兆し
小笠原左知　『シンデレラ』にみられるジェンダー　―Charles PerraultとDisney
五味史恵　インド社会にみる上層カーストの寡婦問題
常盤晃司　Bhimrao Ramji Ambedkar and *Buddha and his Dharma*
吉田章浩　インド中産階層における英語教育の進展とインド統一への道
渡邊知美　ジェンダーにおけるメディアの功罪
相馬佑奈　*Possessing Secret of Joy, Desert Down, Desert Flower* に見る女性器切除のテーマ

窪田憲子ゼミ

中村大介　Kazuo Ishiguro's Criticism of Idealism in International Politics ―Study on *The Remains of the Day*
石崎有沙　'Fallen Woman'としてのRuth ― Elizabeth Gaskell, *Ruth*研究
石綿沙織　Virginia Woolf, *Mrs. Dalloway*にみる生と死
遠藤良恵　*Peter and Wendy*に見る J. M. Barrie の愛情の対象―母親像の研究
河合春佳　*Wuthering Heights* における「死」と魂の結合―Emily Bronte研究
島田憂姫　ヒロイン像と語りの方法―Jane Austen, *Persuasion* 研究
新屋由佳　*The Woman in Black* におけるゴシックの原点
薄　大輔　*Of Human Bondage* における人物研究　―自我の欲求の考察
茅野玲子　孤独から生まれる欲望―Bernice Rubens, *I Sent a Letter to My Love* 研究
南口友香　Charles Dickens, *Oliver Twist* における社会風刺
横石和子　*The Moon and Sixpence* におけるW.S.Maughamの人間愛

谷佐保子ゼミ

羽行夏美　*Rent*においてJonathan Larson が表現するニューヨークのアートとラブ
井上舞子　学校現場における同性愛
今吉光子　60年代アメリカ演劇を通してみるアメリカの「狂気」
梅原功次　テネシー・ウィリアムズ研究
小栗詩織　Ma Rainey's Black Bottom　～Black Music as a Social Context～
川久保美香　喜劇の生み出し方―Neil SimonとNoel Coward が売れた理由
佐藤　薫　Philip Kan Gotanda を通して見る日系アメリカ人
三宮　薫　1920年代アメリカとユージン・オニール
外塚みどり　*Angels in America* を通して見るアメリカ社会と同性愛　―ファンタジーの果たす役割
長谷川絵里子　黒人社会における格差
山本明香　20世紀アメリカ黒人の光と陰

儀部直樹ゼミ

井上孝介　Mark Twain　―黒人差別の認識と文学への反映―
兼久陽一郎　キング牧師　―人物・環境・功績
西岡妙子　『ちびくろサンボ』問題　― サンボからババジへ
渡部汐里　トニ・モリスンの『ジャズ』と人種差別社会の影響
池田理恵　黒人音楽と奴隷制―アメリカ社会変革媒体としての黒人音楽の可能性
大石　晃　『ルーツ』研究　―小説と映像の比較
大瀧　悠　黒人音楽　―黒人音楽の変遷からみるアメリカの歴史
荻野　健　人種とスポーツ
河合紗代子　『アンクル・トムの小屋』における白人と黒人
権藤広明　『アンクル・トムの小屋』に見える思想
猿田　恭　ハリケーン・カトリーナが大惨事を招いた背景
望月美紗子　家族愛　―黒人奴隷の生活の中で

稲垣孝博ゼミ

鶴田智大　*Nineteen Eighty-Four* と *Brave New World* ― ふたつの世界の共通点
島本恵子　*Gulliver's Travels* における諷刺　―Jonathan Swift の現実批判と理想追求―
青柳若菜　*Alice's Adventures in Wonderland*　―アイデンティティの危機と変化への困惑
上妻ななえ　Ursula K. Le. Guin, Earthsea における竜の象徴性―フェミニズムの観点から何を「改訂」したのか
勝間田沙季　*The Wonderful Wizard of Oz* における理想郷

卒業論文一覧・英文学科

小林昌美　*Macbeth*における魔女の役割
高橋翔太　Tommaso Campanellaの理想国家と魔術思想
角田晴紀　Edgar Allan Poeの人工美と自然美
松田ひとみ　*The Lord of the Rings*　―“One Ring”の象徴性

鷲　直仁ゼミ
田渕大輔　歴史背景からみる移民国家オーストラリアの現状と課題
三谷豊司　アメリカに暮らす日本の子どもたちからみる日本の幼児英語教育のあり方
壬生貴士　日本とカナダの多文化主義
藤橋純子　イギリスにおける友愛結婚までの流れから見る現代の日本の結婚
阿部泰宏　日本人と宗教
荒木　瞳　ジブリ映画にみる日本と英語圏の文化比較　―英語版『耳をすませば』"Whisper of the Heart"の考察―
石原　玲　アートの中の女性像
大嶋千尋　性の多様性を認めた共生社会を目指す教育のあり方
黒田繭由　Kazuo Ishiguro, *The Remains of the Day*　―イギリスに対する憧憬とその真実について
小泉佑介　魔法にかけられたイギリス　―イギリス魔法ファンタジーの世界
下田那央　イギリスにおける妖精の変化
高尾　繭　子どもだって知ってるよ？　―日本人の知らない知識マザーグース―
中村真美　『ヴェニスの商人』における対立構造　―ユダヤ教とキリスト教
新田恵里子　The Story of Christmas
畠山康子　ロミオとジュリエットにみられる恋愛観　―現代の恋愛観との違いについて
岡庭亜澄　美女の歴史

中地　幸ゼミ
澁谷沙弥香　*THE L WORD*に見るアメリカ現代社会　―セクシャルマイノリティー
石原実加　「語り」に見られる３つの特徴　―トニ・モリスンの*Jazz*より
位田さおり　「美」とは何か　―*The Bluest Eye*論―
弦間春香　敗北との出会いこそ、生命力と忍耐力をつくる　―マヤ・アンジェロウの作品『歌え、翔べない鳥たちよ』から
澤田綾恵　*Beloved* 研究

今井　隆ゼミ
比嘉春美　Fossilization and Its Process：Why Is It So Difficult to Learn a Second Language?
池田則之　Consideration to Linguistic Theory for GB Theory and Minimalist Program
伊藤菜摘子　The Reconsideration of English Education in Japan
今隈　希　Language Acquisition for Autistics
大久保祐樹　Relationships between UG and SLA　―from the Point of View of No Direct Access for Over-Puberty and Adult Learners
大澤崇宏　The Latest Studies of Synaesthesia in Japan
小口秀美　Comparison of Languages from the Point of View of Meaning
菊池真太郎　Fuzziness on Category Borders in Cognitive Linguistics
鈴木佑美　Bilingualism and Language Acquisition
堀口佳奈　Hands and Language
岩下純也　A Survey of the Latest Studies of Resultative Predicates

福島佐江子ゼミ
大澤明日香　ポジティブ・ポライトネスからみる変わりつつある敬語
岩成周平　謝罪における状況的変数と謝罪ストラテジーの考察
加藤　優　依頼表現に関するストラテジー
梨本絵理香　The Importance of Pragmatics in Teaching English as a Foreign Language in Japan：The Case of Teaching Requests
志水友紀　謝罪に関する一考察
新村麻里恵　間接発話行為に関する一考察
鈴木歩美　敬語に関する一考察　―敬語とポライトネス
竜田有美　ポライトネス理論から見る敬語
花輪美希　携帯メールにおける絵文字の機能：ポライトネス理論の視点から
湯村笑美　間接的依頼表現と含意から見る「察し」に関する一考察

西出公之ゼミ
墨谷桃子　多言語家庭内での一人一言語によるバイリンガル教育とセミリンガルの関係
雨宮貴士　高校英語の教科書における英文法と語彙調査
宇佐美さやか　日本の英語教育についての考察
栗原　愛　共通一次試験に見る大学入試のための英語基礎力
桝谷直樹　TOEICの特徴語彙とリーダビリティー測定

奥脇奈津美ゼミ
太田瑠衣　言語テスティングの観点から分析する大学入試英語センター試験
長田しおり　Language Attrition in L2 Learning
滝澤嘉仁　Factors Affecting L2 Reading Comprehension
湯本幸恵　多読による外国語学習への動機づけ

浜谷ピアソンエロイスゼミ
伊藤綾子　The Importance of Using English in the Classroom
大和田夏美　Learning and Teaching Communication Strategies
紺野佳子　Learners Who Study in an English Speaking Environment Go Back to Their Own Countries and Are Often Judged as Having ′Become Fluent′ or ′More Fluent′ in English. What Does This ′Fluency′ Mean and What Makes Them ′Fluent Speakers′?

卒業論文一覧・英文学科

進藤　宙　Application of Self-Determination Theory to Extensive Reading
攝待明子　English Education to Cultivate Communication Competence in Japanese Elementary School
高木裕康　The Relationship between Students' Emotional Condition and Their Proficiency Level during Listening.
豊村翔一　For Listening
田畑和裕　Vocabulary in English Teaching and Learning

卒業論文一覧・社会学科

社会学科

環境社会学ゼミ（平林祐子）

山中圭子　エコファーマー制度の現状と課題　―山梨県笛吹市を例に―
木田悠樹　エコフィードを推進するために必要な条件とは何か　―養豚を事例に考える―
塩沢晴菜　韓国における廃棄物減量に向けた取り組みについて
崔　敏慧　デポジット制度によるリサイクルの取り組み　―富山大学生活共同組合ごみゼロへ向けた取り組みの事例から―
山口晃良　リユース食器レンタル事業におけるNPOと企業・行政の協働　―「NPO法人スペースふう」の事例を中心に―
田村明日佳　水源林と地域の人々との関わり方の変化　―道志村と横浜市の水源林―
平野文彦　棚田保全のためのグリーンツーリズム、棚田におけるグリーンツーリズムの限界
寺園浩平　原子力発電所との共生のためにどうすればよいか　―原発は本当に不必要なのだろうか―
柴　玲児　再生可能エネルギーの普及促進のためのRPSの役割と課題
佐藤幸輔　北海道・東北６県の環境政策から見えてくるもの　―今後のエネルギー自給率を上げていくには―
伊柳　守　日本で太陽光発電の導入量を更に増やすための新たなカギとなるのは　―住宅用太陽光発電の可能性―
内田亜季　日本における地域ごとの小規模なバイオ燃料生産システムの実現に向けて
菅原彩絵　アジアにおいてエネルギーにおけるエネルギー安全保障と地域共同体の役割

都市環境設計論ゼミ（前田昭彦）

阿部和人　住宅・土地統計調査からみる山梨県の住宅事情の推移
渡邉　彩　重要文化的景観の可能性についての研究　―2008年５月までに指定された９地域のケーススタディ―

環境教育ゼミ（高田　研）

伊藤　希　十日市場湧水群を利用した暮らしの研究
浦野　匠　アユと日本人の関係　―アユをめぐるしきたりと紛争―
岡田陽太　ボーイスカウトにおける環境活動について
清原義玄　地域住民／自然学校の自然との関わり方－青木ケ原樹海の洞穴の事例から考える
桐山鶴久　富士山にまつわる不老不死伝説－徐福・かぐや姫から富士バナジウム水まで
小林隆博　王子製紙の社有林を活用した環境教育の実践とその評価
菅原善光　学校給食における地産地消の実践と可能性　―旧熱塩加納村の事例から―
寺崎哲也　若い世代へ民俗行事の継承　―旧徳山村の例を探る―
日高千織　エコツーリズムと学校教育　―修学旅行の現状と課題―
村北香衣　ファーストフード店の環境配慮について
森山智世　観光のまなざし　―富士北麓・忍野のツーリズムを考える―
山田晃弘　トヨタ自動車の環境戦略　―三重県宮川村の事例から―
横山幸裕　環境にやさしい農業をめざして　―農業の担い手育成事業の課題―
渡辺洋輔　足尾鉱毒地における緑化事業の評価

社会哲学ゼミ（平野英一）

池上雄太　教育とは何か　―ルソー『エミール』に見る理想の教師像―
今井香菜子　なぜひとは信じるのか
大森淳平　近代ナショナリズムの哲学的側面からの考察
小野寺郁美　人間の本性とどう付き合うか　―ホッブズ人間論から見る人間本性とありのままの自分をみつめる―
志田圭佑　動物の権利論の批判的検討　―食肉の否定と「動物」の線引きを中心に―
鈴木寛己　音楽における構造性と開放性　―ジャズ理論を中心とした哲学的考察―
林　薫　差異と差別
牧野英幸　現代における現実感の変容　―情報化がもたらす社会の変化について―
松井のり子　主体の相互関係とコミュニケーション　―コミュニケーションへの間主観性からの考察―
眞鍋有平　児童の道徳性の形成と道徳的判断
渡邉　新　責任概念の変化　―「無責任構造」から「自己責任」へ―
吉田岳史　世界認識における科学の役割　―シモーヌ・ヴェイユの科学論を手がかりに―

企業経営・労働とジェンダーゼミ（野畑眞理子）

相澤文子　日本におけるフリーター問題
織田澤萌　現代人の労働と生活時間に関する意識
清泉佳央里　メディアが描く女性像・男性像

卒業論文一覧・社会学科

清水　聡　ジェンダーから見た女性スポーツの歴史
野沢あやの　子どものジェンダー教育
早川梨恵　パートタイム労働　―正社員との均衡処遇に向けて―
山本順子　ポジティブ・アクションとファミリー・フレンドリー

生涯学習論ゼミ（畑　潤）
兼久嘉教　食育の在り方についての考察　―食育は私たちの生活にどの様な影響を与えるのか―
古屋桜絵　食の安全とグローバリゼーション
星谷美奈実　楽しい学びを実現するために　―経験を重視した教育活動を考える―
堀内竜太　学童保育　―これからの学童保育について―
川渕祐介　新自由主義的教育改革についての考察
奥村孝輔　「心のノート」の存在意義　―河合隼雄の子ども観から見た「心のノート」の意図するものとは―
坂本康次　不登校からの回復　―学校現場からできる支援―
諸星智慶　若者はなぜ「自分探し」をするのか　―生きづらい現代社会と若者の苦悩―
中島さくら　定年退職後の学び　―高齢者・団塊の世代からみるこれからの学び―
芦田亮平　生涯スポーツ論
岡田千奈　スポーツがもたらす人間形成への影響　―スポーツの在り方を考える―
永井康雄　学校が抱える部活動の問題　―地域スポーツクラブから学ぶ―
中前　輝　生涯スポーツの社会的意義と可能性　―Ｊリーグ百年構想が目指す地域クラブ像―
吉野聡美　ちびくろサンボから学ぶこと　―日本人と差別―「差別」とともによりよく生きる方法
柴田志保　芸術文化活動における宝塚歌劇の魅力について

地域史ゼミ（畔上直樹）
大槻幸央　米価騒擾時における救済策とその実態　―東京の公設市場と購買組合を中心に―
大野秀彰　大正から昭和期における上州郷土史研究者の活動と展開　―『上毛及上毛人』と豊国義孝を例にして―
大輪恵弘　川上善兵衛の軌跡を通してみた農本主義　―「葡萄」を選択した篤志家―
落合結依子　戦後生活改善運動と葬儀形態の変化の関連性　―島根県旧平田市上岡田町下講の事例から―
河西良子　養蚕教師と養蚕信仰　―明治・大正期養蚕の技術普及活動と民俗―
近藤　進　「新潟小唄」の誕生に見る戦前の新潟市に関する考察　―地方中小都市と音楽文化―
杉本みゆき　戦前・戦後の助産婦とその地域的役割　―岐阜県中津川市の開業・勤務助産婦からの聞き取りをてがかりに―
高橋慶伍　横浜開港と絹の道　―相模原市漸進社の事例を手がかりに―
南郷　展　アメリカ軍政下の奄美女性　―『祖国復帰運動』における地方文化の昂揚と全階層的な女性運動の展開―
早川史穂　山梨県の戦時体制　―中村星湖の郷土文化論から考える―
道村南海　山梨県における宮大工の近代　―松木輝殷と藤村式建築―
宮尾陽平　日系新聞からみるカナダ・バンクーバー日本人移民社会　―『大陸日報』、『日刊民衆』を中心に第二世問題を分析する―
宮坂香菜子　戦時社会における国民統合の多面性　―長野県諏訪郡落合村の満州移民事業における労働力動員問題をてがかりに―

憲法ゼミ（横田　力）
友葭大貴　裁判員制度導入における議論
権守達也　表現の自由論における性表現規制
須田稔幸　公的給付と表現の自由　―RUST判決、富山県立美術館事件判決からの考察と課題―
南　有祐　裁判と人権保障　―日本の司法制度の問題点と課題、刑事司法の問題を中心として―
金子智明　報道被害と人権　―表現の自由から考える

地方自治論ゼミ（大和田一紘）
柏木彰子　公立保育園の民営化とその課題　―格差社会の中の公立保育の必要性―
白石千紘　ワーキングプアとその支援について
野津克哉　スポーツと地域性の関係について
藤本真美　第三セクターとPFI　―福岡市を事例に―
本田玲子　放課後教育とその展望

日本経済論ゼミ（川上則道）
服部延孝　タバコ産業の現状と方向性について
浜砂智之　任天堂における創造性について
内田　望　国の政策と地域　―南アルプス市の場合―
越智悠哉　ヤマダ電機の経営戦略
貴田琢登　非正規雇用について
近藤　恒　金融機関におけるＣＲＳについて
齋藤恵弥　非正規雇用の実態分析
神　正幸　日本プロ野球経営の現状点・問題点・課題
高野まなみ　教育にあらわれた社会的格差の構造
冨澤岳人　パチンコ業界の抱える問題と業界改革に向けた新たな取組み　―大衆娯楽になるために必要なものとは―
三村明弘　日本企業における人的構造の問題点

地域経済ゼミ（加藤幸治）
岡地ちひろ　山間集落における活性化の取り組み　―京都府福知山市大江町毛原地区を例に―
但木香緒里　福島市における直売所の展開とその性格
丸山祐佳　「昭和レトロ」を利用した集客活性への取り組み　―青梅駅周辺商店街の活動―
永田麻依　地方圏における自立したまちづくり　―大分県九重町における観光まちづくり―

社会法ゼミ（中益陽子）
上田賢祐　日本の派遣労働の現状と課題　―なぜ派遣労働者は貧困に陥るのか―

卒業論文一覧・社会学科

鈴木将平　日本の高齢者医療制度のあり方とは
浜名　綾　定年後も働き続ける日本人　―高齢社会における高齢者雇用の在り方―

地域社会論ゼミ（田中夏子）
江口尚志　市町村合併地域における住民参加のまちづくり　―新潟県上越市と長野県木曽町の比較検証―
郷田敦子　公共サービスの民営化にともなう、行政や住民の活動の変化－指定管理者制度を導入した文化施設を例に―
桜井 明子　「農」を支える人びとの働き方の課題と可能性
清水佐知子　小売業者と地域社会の共存の可能性を探る　―甲府・韮崎の大規模小売店および商店街の動向を踏まえて―
富田祥子　中心市街地の活性化と大型店の郊外進出　―政令指定都市浜松市を事例に共存共栄の道を模索する―
橋本佳彦　駅前再開発からみたまちづくり　―上尾駅の再開発を事例として―
福島花枝　地域循環型社会を形成するための仕組みと課題
堀内美香　地域・学校・家庭の新たな連携による子育てと地域の教育力向上による地域活性化の可能性と課題　―千葉県木更津市・神奈川県横浜市の教育から子どもが育つ地域社会を検討する―
前田栄輝　大型店舗進出と中心市街地活性化　―鹿児島市の天文館アーケードを事例にして―
松尾祐弥　住民意識に響くイベントの創出とは　―様々な例から学びとる地域再生イベントの条件―
水上美奈　母子家庭の母親の生き方・考え方から学ぶこと
向井沙織　地域社会における地場産業の現状　―広島県東広島市の清酒製造業を事例に―
山本ひかる　地域社会における少子化と子育て環境形成の課題　―八王子市と木更津市を事例とした子育て・町育て―
吉積千穂　地域での次世代育成と地域活性化の関係と可能性　―若者を地域の構成員とする地域づくり―

卒業論文一覧・比較文化学科

比較文化学科

伊香俊哉ゼミ
何　彦峰　重慶爆撃の実態　―論文から見た重慶爆撃―
國本和宏　第三帝国におけるアドルフ・アイヒマンの位相　―人間・近代・ホロコースト―
戸塚和沙　中世における日本とヨーロッパの戦争の実態　―庶民と戦争－
長澤麻菜　琉球文化　―固有信仰と祖先祭祀―
永田結美　新選組の実態とヒーロー性　―多様化するイメージと歴史上人物の“現代”における必要性―
波多野恵　イランにおける宗教革命　―その背景と実態―
平田司沙　ドイツのナチズム観と教育　―平和教育の役割―
藤原舞子　戦争と記憶　―現代アメリカはなぜ「好戦的」と表象されるか―
横川冴子　中国旅行業のエスニック観光

鳥居明雄ゼミ
有明茉莉　なまはげと鬼・神との関係性
稲村裕子　少女漫画の中のジェンダー　―絵夢羅『Wジュリエット』―
長田史織　笑いの質
栗田侑里枝　富士山の絵画
小堀弥香　サッカーにおいて表象される日本のナショナリズムと韓国
中原瑞貴　三木清『人生論ノート』について
西平ひかる　奄美の宗教観について　―歴史から見る奄美とカトリックの関係性―
堀内はな　落語の笑いと落語ブームの背景
渡辺裕子　憑きもの、憑依について

山本芳美ゼミ
牛島ちひろ　日本人の名前と名付け　―昭和初期から現代までの流行を通して―
大平慧子　脳死臓器移植に対する日本人の曖昧さ
小田香織　人気ファッション雑誌の広告分析
亀山奈歩　料理の伝承からみた現代家族
川住聡美　中高生のおしゃれ意識　―おしゃれ障害に関連して―
小山美保　纏足　―社会的機能とその盛衰―
斎藤健輔　女性の社会進出における集団就職の役割　―祖母のライフヒストリーを軸として―
佐藤由梨　戦後日本における結婚式　―長野の祖母へのインタビューと雑誌『ゼクシィ』の分析を中心に―
鈴木崇子　岩手県一関市花泉町の食文化
鈴木雄太　ロック音楽と平和活動　―ジョン・レノンを中心に考える
杉村有紀　日本における眉化粧
芹澤菜々美　現代主婦の姿　―キャラ弁主婦ブログを基に―
峰村春香　石垣島の観光とイメージ　―旅行雑誌の分析から―

邊　英浩ゼミ
真田裕美　領土ナショナリズム　―竹島をめぐる日韓の紛争―
林　美咲　韓流を読み解く　―映画とドラマを中心に―

笠原十九司ゼミ
赤羽美幸　アンコール遺跡　―修復をめぐる人々の交流―
石黒陽平　マレーシアの多民族社会　―人の移動と多様性の形成―

卒業論文一覧・比較文化学科

大江佑花　新世代の在日コリアン　―在日コリアン青年意識調査をもとに共生を考える―
草彌倫子　東南アジアにおける日本の戦後賠償
栗城洋子　大衆文化をめぐる日韓両国の意識変化
中村宙江　ベトナムの宗教政策と国民統合
西野真梨　インドネシア　―戦後賠償とODA―
松村裕貴　独島／竹島問題　―平和解決に向けて―
李　広飛　東アジアのグローバリズム

内山史子ゼミ
古畑えり奈　タイにおける経済格差問題　―東北部の貧困―
飯村めぐみ　マレーシアの労働環境の変化　―ブミプトラ政策とその下における工業化―
一ノ瀬佳那　持続可能な観光開発　―東南アジアのエコツーリズムの現状と課題―
小野真澄　バリ島の観光と芸能
加藤麻弓　フィリピン人女性エンターテイナーの現在に至るまでの状況と今後の展開
門ノ沢有佳里　戦後日本企業の東南アジア進出　―自動車産業の展開を中心に―
北熊美里　ミャンマーのカレン族による民族解放運動
焼田知香　東南アジアの開発と環境問題

分田順子ゼミ
神山響子　アメリカにおけるマネジドケアの隆盛と無保険者の増加
伊沢早織　老後をフィリピンで　―介護移住という選択肢―
市川遥子　マイクロクレジットの可能性　―バングラデシュの貧困女性はどう変わったか―
大窪翔子　世界水準の「美女」をプロデュースする　―イネス・リグロンと美容関連企業の提携―
高本直美　サステイナブルな共同生活を求めて　―日本におけるエコビレッジの現状と課題―
冨田佳織　コーヒー危機への挑戦　―スターバックスコーヒーのフェアトレードの可能性と限界―
橋本麻希　黒人ストリートアーティスト、バスキアの人種主義への抵抗　―描かれた王冠の意味するもの―
林　初美　チョコレート産業とカカオ農家の貧困　―世界カカオ基金は現状打開の鍵となるか―
本田千春　グラフィティ　―若者の衝動から生まれたカルチャーをめぐる抗争―
柳橋知穂　カーボン・オフセット事業の現状と課題　―英国カーボンニュートラル社の事例を中心として―
和田沙也佳　ホームレスの社会的包摂を目指して　―横浜市寿町「さなぎ達」の活動―

福田誠治ゼミ
菊池ふくみ　Canadian Black Gold Rush　―カナダ・アルバータ州、オイルブームに沸く街の現状と課題―
赤平詩保子　日仏交流の歴史と変遷
大塚香織　神話からみる生と死
蔵谷まりこ　アメリカ合衆国における黒人と音楽　―モータウン・ミュージックと黒人社会の関係の考察―
白戸渓子　在外外国人の子どもの教育
桑原いずみ　サンタクロースの歴史と文化
近藤美里　自然に優しい生き方　―スウェーデンの環境教育―
佐藤なぎさ　外国人の子どもの教育　―「オアシス」の活動をとおして―
高橋候子　ロシア絵本とアニメ
高橋友希　オランダ　―多文化社会のあゆみ―
千葉基博　教育協力における潜在能力アプローチの役割　―教育の持つ二つの自由に着目して―
似内友香　移民社会　―法と人権の間にいる人々―
横山明日香　リヴァプールとアメージング・グレース　―ある奴隷貿易商人が生んだ賛美歌―
吉津知美　犬が殺処分されない国、ドイツ

那須千鶴（大辻千恵子）ゼミ
磯部麻美　国際人身売買の実態　―闇の世界で働く女性たち―
伊藤奈津子　なぜ人々はファーストフードを食べるのか　―マクドナルドを例に考える―
大浦拓也　ボブ・マーリーとラスタファリズムの関係性について
坂野文菜　戦争とメディア
望月香奈江　性同一性「障害」　―心と体のギャップ―
山岡幸佳　働く女性の子育てとワーク・ライフ・バランス
山下愛未　沖縄米軍基地の実像　―見えざる沖縄の素顔―

大森一輝ゼミ
馬場智也　米公民権運動期における黒人について　―黒人の自由・平等への道―
秋葉志保　日本人とヒップホップ
作山美乃莉　ＥＵとアメリカの言語政策
佐々木ちさと　日本における異文化受容について
祖慶有佐子　アメラジアン　―沖縄社会と米軍基地の狭間で―
竹田愛美　より実践的な『性の商品化』対策
塚島さやか　乳幼児の食事　―０歳から６歳までの食事―
坪川未歩　アメリカ・インディアンの現代を生き抜く力　―現代のバッファロー―
藤原　龍　黒人の生み出す音楽　―ブラックミュージック形成への経験―
山田千裕　未だ不平等なアメリカ　―黒人大統領という存在の意味―
豆川このみ　日本の女性ファッション誌の特性

重冨恵子ゼミ
石原　剛　企業の社会的責任とは何か　―日本経済界による定義に関する一考察―
太田仁美　高度経済成長が農家に及ぼした影響」
梶田弥希　日本でマンガが育ったわけ　―少年週刊誌を中心に―
河野　格　白神山地問題にみるコモンズ　―自然保護のあり方を考える―
斉藤紀子　エコビジネスと持続型社会
高瀬恵理　ピルに関する考察　―使用者の立場から―

卒業論文一覧・比較文化学科

中田　南　身近なミネラルウォーター　―日本が抱える飲用水問題―
橋本聡美　生徒のストレスと受験に関する考察
星野幸代　トランセンド法　―紛争解決の手段として―
渡邉麻莉子　ごみからみる、消費スタイル　―容器包装ごみを中心に―

岸　清香ゼミ
有吉由貴　参加型「1万人の第九」の誕生　―クラシックの大衆化を目指して―
遠藤はるか　ブータンにおける教育の「近代化」　―五ヵ年計画の成果と課題―
小川晶子　カスピ海沿岸地域における開発と環境　―カシャガン油田から見る環境配慮型開発―
河原　愛　梅蘭芳がもたらした京劇の国際化　―大衆演劇から世界演劇へ―
武田光加　ルイ・ヴィトンの大衆化と限定品戦略　―ファッション誌にみる村上隆のコレクションライン―
張　牽哲　現代中国のネット社会　―オンラインゲームが生み出す「協調活動」の実態―
角田美奈子　遊びを通して読む力を育てる　―甲州市立勝沼図書館におけるアニマシオン活動の可能性と課題―
前園奈々絵　戦後日本のテーマパーク建設と浦安　―漁師町から東京ディズニーランドの街へ―
松浦雄介　現代日本青年における解離現象　―質問紙による解離性傾向と自我同一性、対人ストレスイベント・コーピング、自己決定感との関連研究―
室万里奈　現代日本人女性の目ヂカラ信仰　―生む市場、説くメディア―
山口　周　靴と日本人　―シューフィッター制度の現状と再整備の必要性―
渡部　翼　カローラ　―「大衆車」ブランドの形成と解体―

研究論文・修士論文 ― 文学専攻科・大学院文学研究科

文学専攻科

佐藤　隆先生
小久江友見　子どもが学べる授業
高松祐介　アニマシオンを通しての学級造りと子ども理解
中條秀基　保護者と地域住民の学校参加に関する研究
中野仁美　学校参加からうまれる絆　―子ども・親・教師をつなぐ―
細辻浩介　通常学級に在籍する発達障害のある児童に対する質の高い教育的対応とは　―『通級による指導』の可能性と限界について―
吉新麻奈美　学び合う授業と学力

筒井潤子先生
小山侑衣　子どもとともにつくる学級　―“自分”を出せる学級づくりを目指して―

藤本　恵先生
荘司鮎美　絵本の魅力　―国語科での教材化を目指して―
平田　文　絵本と子ども　―手作り絵本の授業―

箱石泰和先生
松盛ひろ子　公立小中学校における外国人子女教育の可能性　―真の多文化教育を目指して―

大学院文学研究科
国文学専攻

牛山　恵先生
倉内弥生　―硝子箱の中の少女時間―　吉屋信子『花物語』研究

佐藤明浩先生
岡本要子　『保暦間記』の研究
望月一仁　『古事談』編者の意識　―説話に見る歴史認識についての一考察―

英語英米文学専攻

窪田憲子先生
髙瀬裕美　A way of Reaching the Harmonized World in E.M.Forster's *Howards End* and *A Passage to India*

社会学地域社会研究専攻

今泉吉晴先生
竹内華純　現場に立って考えた環境教育についての試論　―学問的・経験的視点から―

田中夏子先生
中嶋　智　社会教育および環境教育の視点からみたまちづくりの可能性　―じろ倶楽部を題材とした「子どもの育つ地域社会」像の検討―

比較文化専攻

笠原十九司先生
崔　小萍　日中両国青年の歴史認識に関する考察　―南京事件を事例にして―
朴　桂仙　在韓華僑・華人の歴史と現在　―仁川チャイナタウンを事例として

大森一輝先生
林　小夏　アメリカと中国の多民族社会におけるバイリンガル教育の比較

臨床教育実践学専攻

森　博俊先生
小俣貴美　中学校特別支援学級における進路問題とその背景合格　―Y県における当事者への聴き取り調査から―

河村茂雄先生
福光奈緒子　女子中学生における過剰適応についての一考察
前田美穂　自己中心的な特徴を示す大学生の実態に関する研究　―友人関係における不適応に焦点をてて―

講演会だより　地域交流研究センター・現代GP共催第５回地域交流研究フォーラム

＊＊報告＊＊

第５回地域交流研究フォーラム

フィールド・ミュージアムへようこそ！

― 地域とともに　自然とともに　私たちがめざすもの ―

初等教育学科准教授　坂田有紀子

＊＊

２月21日(土）に第５回地域交流研究フォーラム「フィールド・ミュージアムへようこそ！　地域とともに　自然とともに　私たちがめざすもの」が、地域交流研究センターと現代GP（環境教育GP）[註1)]の共催で開催されました。午前中は、都留文科大学における環境教育の取組の紹介として、環境教育GPの活動報告がおこなわれました。始めに都留文科大学フィールド・ミュージアム構想と環境教育GPの概要説明がおこなわれ、次に環境教育GPの３つの柱：Ⅰ．自然に学ぶ（自然環境教育）、Ⅱ．農に学ぶ（食・農・循環の学習）、Ⅲ．暮らしに学ぶ（人・町・自然をつなぐ地域研究）に沿って、具体的な活動報告がなされました。北垣憲仁氏（本学地域交流研究センター特別非常勤講師）による「フィールド・ミュージアムの広がりと出会い」、西本勝美氏（本学初等教育学科教員）による「自ら食を生み出す～大学農園の挑戦～」、河野格さん（本学比較文化学科４年生）による「今夜は大家族！都留フィールドミュージアムカフェ奮闘記」のそれぞれの報告は、都留という地でフィールド・ミュージアムの思想と実践が着実に定着しつつあることを実感できる大変すばらしい内容でした。

102会場の様子

カフェの展示

午後は大学生や地域の方々による展示・交流会がおこなわれました。フィールド・ミュージアム、フィールド・ノ

地域交流研究センター・現代GP共催第５回地域交流研究フォーラム

ート、カジカとカワラナデシコの保全活動、太陽光発電によるエコイルミネーション、フィールド・ミュージアムカフェ、ソローの小屋プロジェクト、Grow Wild Camp、たんぼクラブ、Social 菜園's Club、社会学科のプロジェクト研究、市立図書館による展示、シオジ森の学校、岡部工業所の薪ストーブ、ほしのさと工房の天然酵母パン、の14団体から個性的かつ楽しい展示が出展され、来場者との活発な意見交換がおこなわれました。いずれも地域に根ざし、地域との交流を育みながら続けている意義のある取組で、今後もこのような形で交流が深められたらと思います。

午後の後半は、全体集会「みんなで語ろう　環境教育私たちがめざすもの」というセッションがおこなわれました。まず本学社会学科教員の高田研氏により基調提案がなされ、パネリストの上田司さん（都留市禾生第一小学校教員）、しらいみちよさん（都留市在住　歌手）、岡田淳さん（本学初等教育学科４年）にそれぞれの経験・立場から“地域や学校における環境教育のあり方”について発言・提案していただきました。司会・進行役でファシリテーターの青木将幸さんのおかげで、参加者の間でも活発で有意義な意見交換ができ、参加者全員が何かしら、共感できるキーワードや地域や自らの課題、希望、ヒントを見出せたのではないかと思います。

参加者との意見交換

今年のフォーラム参加者は昨年の110人に比べ、77人とやや少なめではありましたが、ご参加いただいた地域の皆さんからは大変すばらしい意味のある取り組みである、とのお褒めの言葉をたくさんいただきました。この地域交流研究フォーラムが、大学と地域をつなぐ交流の場として、今後もたくさんの方にご参加いただければと願っています。

最後になりましたが、フォーラム開催にあたり、地域交流研究センターおよび環境教育GPのスタッフを始めとして、本当に大勢の方々に協力・支援いただきました。紙面の都合上、全員のお名前を挙げることはできませんが、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

パネリスト４人によるセッション

（註１）

現代GPとは、文科省によって選定された“現代的な教育ニーズに応える質の高い大学教育プログラム”のことで、GPはGood practiceの略。平成19年度には全国の大学から延べ81件の応募があり、本学を含む16件のプログラムが採択されました。本学ではこの現代GPに選定された取組「山・里・町をつなぐ実践的環境教育への取組：フィールド・ミュージアムへようこそ！」のことを、**環境教育GP**と呼んでいます。

講演会だより　英文学科・英語英文学会共催講演会

英文学科・英語英文学会共催春季講演会 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

リチャード・ライト生誕100年記念講演

― ジュリア・ライト氏とマリエマ・グレアム氏を迎えて

英文学科教授　中地　幸

＊＊

本年度の春季講演会は６月25日に開催された。今回の講演はアフリカ系アメリカ人作家リチャード・ライトの生誕100周年を記念して世界各国（アメリカ、フランス、ポルトガルなど）で行われた行事の一環ともなった。

2008年がアフリカ系アメリカ人初のアメリカ大統領が選出された年であったことを考えれば、そのような年にリチャード・ライトという白人至上主義社会に挑戦し続けたアフリカ系アメリカ人作家について考えることができたのは実に有益なことであったといえる。

講師はリチャード・ライトの長女でフランス在住のジャーナリストであるジュリア・ライト氏とカンザス大学英文学科教授でライト研究家のマリエマ・グレアム氏の二人である。

ジュリア・ライト氏は、講演「『アメリカの息子』から俳句へ ―リチャード・ライトの生涯における精神の旅」において、食物だけでなく知識そのものへの飢餓を経験したライトの少年時代から俳句作りに没頭する晩年に至るまでの魂の軌跡を熱く語った。

ジュリア・ライト氏（左）のサイン会

ライトが日本文化に強い関心を持ち4000句以上もの俳句を作っていたことに驚いた人も多いようだった。一方グレアム氏は「リチャード・ライトと自伝の文化、あるいは伝記の文化」という題目のもと「自伝」という文学ジャンルとアフリカ系アメリカ人の歴史について語った。

講演会の後は、コミュニケーション・ホールで質疑応答やサイン会が行われ、大変充実した時となった。

英文学科・英語英文学会共催秋季講演会 ＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

英文学科秋季講演会を終えて

英文学科２年　大谷将也

＊＊

2008年11月19日に、西南女学院大学教授飯田一郎先生により、「英語とキャリア形成」という題で、昨今のビジネス界における英語の在り方について講演をして頂いた。この講演で先生は、世界語になりつつある英語という言語が、我が国日本においても仕事をしていく上では、各々の職種の技能とほぼ同等に必要とされているし、いずれ近い将来には、小さな町工場であっても外国の企業と活発な交流することになり、その際には、必ず英語の能力が必要になるであろうという事を強調された。また、日本へやってくる外国人の数が、海外へ出る日本人の数を大きく下回っていることに触れられ、外国人を増やすためには、日本人がより一層日本文化を世界に知ってもらうように努力してゆくことの大切さや、そのためには、自国の文化を理解した上で、英語で日本の文化を発信していかなければならないということを教えて頂いた。この講演会を通して私が考えたことは、自国の文化を学びつつも、他国と渡り合うためには、実用的な英語というものを学び続けなければならないということである。改めて英語の重要性について認識した。

明確な論理で英語の必要性について語る、講師の飯田一郎氏

講演会だより　社会学科・地域社会学会共催講演会

＊＊

食の自治を展望する地域づくりを

― 社会学科・地域社会学会共催　大江正章氏講演 『地域の力－食・農・まちづくり』をめぐって ―

社会学科教授　田中夏子

＊＊

去る2009年１月21日水曜日、都留文科大学２号館１階101教室にて大江正章氏による講演会が開催されました。

大江正章氏は、農業や環境保全、サステイナビリティを軸とした地域起こしを、25年以上にわたって取材、分析なさってきたジャーナリスト、編集者です。地方都市や山間集落における地域再生論のみならず、首都圏／都市地域における中心市街地問題や都市農業論といった幅広い領域で、発信と実践を重ねてこられました。また、自ら執筆をするのみならず、編集者としても、上記の分野を中心に約300冊の本づくりを手がけていらした方です。

お話の全容は、都留文科大学地域社会学会編『地域社会研究　第19号』（2009年３月発行）に掲載されていますのでそちらをご参照ください。以下では、本専攻の取り組みにとって示唆深い２点を中心に述べていきましょう。

まず第一点目です。ご講演の前半では、ご著者『地域の力』にも紹介されている愛媛県今治市の学校給食事業を挙げ、「地産地消による給食事業への切り替えは、特に農業が盛んな地域でなくとも成立する」こと、「例えば1000人の児童の給食をカバーするじゃがいもは1.5トン、それを賄う畑の面積は20アールから30アール。人参なら･･･」と説得的な数値を並べて、地産地消型給食事業が身近なものであることを強調なさいました。地方ではなく、東京の日野市（農業人口は２％）であっても学校給食の４割が地元供給されていることなども紹介し、「都市農業」の可能性を示していただきました。

続いて第二点目として、こうした地産地消型農業がしっかり地域に根を下ろし、社会的認知を得るためには、消費者でしかなかった市民が農のある生活に携わること、またその市民に対して畑地を提供し、技術指導をする活動が、農業者にとって経済的な保障ともなること等、地産地消の回りに新しいライフスタイルと仕事が生まれる仕組みが必要だとなさいました。この点についても、興味深い試算を通して、上記の実現可能性が決して少なくないことが示されました。例えばたった30平米の畑地で一年通じて25品目の野菜が収穫でき、ある市民参加者の実績計算では、９万２千円相当の野菜が自給できたとのこと、それを指導する農家が農協出荷に比して二倍の農業関連所得を得られること等。

示唆深い論点は他にもありますが、この二点からだけでも、以下のことが見えてきます。すなわち、市民が、素性の知れた食材を、主食も含めて自給、調達することは十分可能であり、それが、輸入農産物に圧迫されたり、農政からおきざりにされる小規模農家を支えるテコともなること、そして食を通じて「農」と「まちづくり」が互いに活かし合う関係を作りうること等です。幸い、都留市は農業特区でもあり、農をめぐる実験的な取り組みが制度的に開かれています。市民の中には、学校給食問題に熱意も持たれている方がおり、また、学生の中にも「農のある生活」が静かに浸透しつつあります（「地域交流センター通信」第14号参照）。

これらが相互に結びあう場を作り、食の自治を拡充する地域づくりができれば･･･と考えています。

講師紹介

大江正章（おおえ・まさあき）

コモンズ代表。ジャーナリスト。1957年、神奈川県生まれ。著書に、『地域の力―食・農・まちづくり』（岩波新書）、『農業という仕事―食と環境を守る』（岩波ジュニア新書）、『公共を支える民―市民主権の自治』（共著、コモンズ）など。

講演会だより　比較文化学科・比較文化学会共催講演会

＊＊

アンコール・ワットと国際貢献
～国際協力とは人間の協力～

講師：石澤良昭 先生

比較文化学会事務局　比較文化学科３年　田中　円

＊＊

講師の石澤先生

2009年１月21日、「アンコール・ワットと国際貢献～国際協力とは人間の協力～」をテーマに比較文化学科・比較文化学会共催講演会が開催されました。今回はアンコール遺跡研究の第一人者として多くのテレビ番組にもご出演されている上智大学学長の石澤良昭先生を講師にお招きしました。

石澤先生は学生時代にカンボジアに赴き、その際自ら修復作業に参加したことをきっかけにアンコール遺跡研究と修復活動の道を究めようと心に決められたそうです。その時の経験から現在に至るまでの修復活動の様子、遺跡研究に関するお話をしていただきました。

また講演の中では遺跡に描かれている壁画や彫刻の多種多様な写真を実際に見ながら、それが持つ宗教的な意味合いや背景を詳しくご説明いただいたことで、遺跡が現地の人々にとってどのような存在だったのかということやその重要性を知ることができました。

今回の講演会で印象に残っていることは、アンコール遺跡の修復作業が単なる経済面や技術的な支援という面での協力・貢献ではないということです。先生の目指す“国際協力の在り方”とは「人同士が互いに信頼関係を築き続けること」であり、カンボジアの現地の人々が自分で自分たちの遺跡を守ることができるようにするのが私たちの役目であると同時に国際協力の形だとおっしゃっていたのがとても印象的でした。近年では日本の企業がこうした修復活動への支援を行うといった取り組みもみられるそうですが、あくまでも「人の協力」のひとつであり看板を付けて企業を宣伝するための活動ではないそうです。国際協力に関心があり講演を聞いていていた学生にとっても、「協力」の本質を改めて考え直す良いきっかけが与えられました。

碑文や壁画・彫刻などをもとにアンコールの社会をひも解かれた

今回の講演会には100人超の学生が参加しました。２時間に渡る講演の中熱心にメモを取り、終了間際まで真剣に聞き入る学生の姿が見られました。また講演会終了後に開かれた懇親会に参加し、石澤先生に直接質問を投げかける学生の姿も多くその関心は非常に高いものでした。現場の第一線で実際に修復作業を行ってきた石澤先生であるからこそ伺うことが出来た貴重な体験談は、グローバル化の時代に比較文化を学んでいる私たちにとって重く響き、大変刺激を受ける講演会となりました。

講師紹介

石澤良昭（いしざわ・よしあき）

上智大学学長、上智大学アジア人材養成研究センター所長、上智大学アンコール遺跡国際調査団団長

遠隔教育授業・交流プログラム

新しい 遠隔交流授業の実施

情報センター教授　杉本光司

昨年度から都留文科大学地域交流センターの取り組みの一つとして組み込まれました、「地域情報教育」プログラムも、これまで、都留第二中学校と大学、東桂小学校と大学を結んだ遠隔教育授業・交流プログラムを実施してきました。そして、今年度は地域交流研究センターの備品設置支援として、宝小学校に遠隔交流機器を設置いたしました。

そこで、今年度はこれまでのような、大学と接続したプログラムではなく、東桂小学校と宝小学校を結んだ、初めての小学校遠隔交流プログラムを平成21年2月13日(金) 午後４時から実施しました。今回は第一回目という事もあり、お互いの児童会役員による学校紹介を行いました。プログラムは、それぞれの自己紹介から始まり、はじめに宝小学校での児童会活動について説明を行いました。宝小学校では『笑顔いっぱい、元気いっぱい、友達いっぱい宝小』のテーマのもとで、「あいさつ運動」、「たてわり班活動」、「ボランティア活動」についての実績が報告され、それに対して、東桂小学校からは、それぞれの取り組みにおける成果や内容、また「あいさつリーダー」についても質問が寄せられました。

宝小学校のスクリーンに写った東桂小学校の様子

宝小学校児童会役員

続いて、東桂小学校からは、『元気いっぱい！思いやりのある東桂小児童会』のテーマのもとで、「元気よく体を動かそう」、「思いやりの心をもって行動しよう」、「きれいな学校にしよう」という目標について、それぞれの具体的な活動について報告されました。宝小学校からも、取り組んだ内容や成果、「運動会に地域のお年寄りを招待した」方法について、また、「ゴミレンジャー隊」への質問が寄せられました。

宝小学校の教室には、市内の小中学校の情報教育担当の先生方も集まり、初めての小学校間の交流授業を熱心に見守っていました。

子どもたちにとっては、もちろん初めての小学校間を結んだ交流プログラムでしたが、「緊張したけど楽しかった」、「ビックリした」、「もっといっぱいしたい」等の感想も寄せられ、今後の継続的な活用についても期待が寄せられました。また、子どもたちが帰宅後、宝小学校で行った話し合いでは、宝小学校の先生や情報教育担当の先生方からも、「インターネットを利用した仕組みについて」、「もっと気軽に使用できる方法について」、「映像を利用する方法」等についても質問があり、この取り組みに対する大きな期待が寄せられています。

今回の取り組みにあたり協力して頂いた方々は次の通りです（敬称略）。

宝小学校児童会役員：小池辰也、山中　迅、武井春香、中江知穂、鈴木和裕、小野瑞希

東桂小学校児童会役員：池谷茜里、清水裕斗、平井裕也、相川果穂、奥脇開斗、天野裕貴、吉見裕希、佐藤衣純、佐藤祐大

情報メディア演習Ⅰ・Ⅱ受講生：伊藤　真、置田　純、大橋洋和、奥村友生、横山敏紀

情報センター：重森　収、関戸章雄、君田和子、大輪知穂

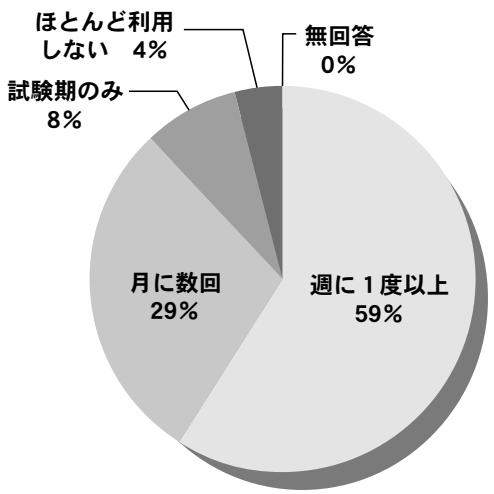
取りまとめ：林　武史（宝小学校）、長門知広（東桂小学校）

図書館だより

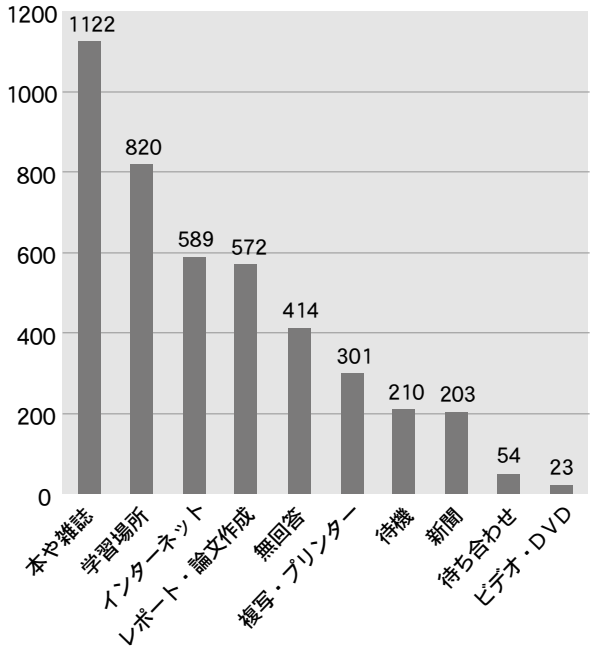
図書館アンケート　調査結果

都留文科大学附属図書館では、図書館利用の現状や学生の意識を把握し、今後の図書館運営方針やサービス内容の検討するため、10月16日から11月５日まで「図書館アンケート」を実施し、718件の回答をいただきました。ご協力ありがとうございました。　アンケート調査結果の一部を紹介します。

図書館の利用頻度



図書館の利用目的



❶ 図書館の利用頻度

週に１回以上来館する人が59％と多く、図書館が多くの学生に利用されていることがわかります。

しかし、少数ではあるがほとんど図書館を利用しないと回答した人もいました。利用しない理由を多肢選択方式で聞いたところ、「利用の必要がない」「利用する時間がない」との回答が多くありました。

❷ 図書館の利用目的

図書館を利用する際の目的に優先順位をつけてもらい、１位に３点、２位に２点、３位に１点をつけて回答数と掛け合わせ、回答スコアとしました。(平均点は430.8点)

また、優先順位の記載されていないものは無回答としました。

学習やレポート・論文作成時といった、席の利用が多いことがうかがわれます。またこれらの利用の際には本や雑誌も利用することが考えられます。インターネットの利用も多く、図書館利用目的が多様化していることがうかがわれ、主な利用対象として、資料、席（場所)、インターネットをあげることができます。

❸ 図書館に所蔵すべき資料

図書館に収集すべき資料として、多肢選択方式での意見では、専門的図書が多くあげられました。(453件）続いて、雑誌類(87件)、CD・DVD（82件)、その他（81件）の順となっています。その他には現代小説などの図書、文庫本、新書本、話題に

図書館アンケート　調査結果

なっている本などが多くあげられました。

❹ 資料の貸出冊数・期間について

貸出冊数・期間については、78％の方から現状でよいとの回答がありました。変更を希望する方の意見としては、一般図書の貸出冊数を増やし、期間を長くしてほしい、課題図書の貸出期間を長くしてほしい、雑誌の貸出期間を長くしてほしいというものが多くあげられました。

❺ 図書館の施設・利用環境

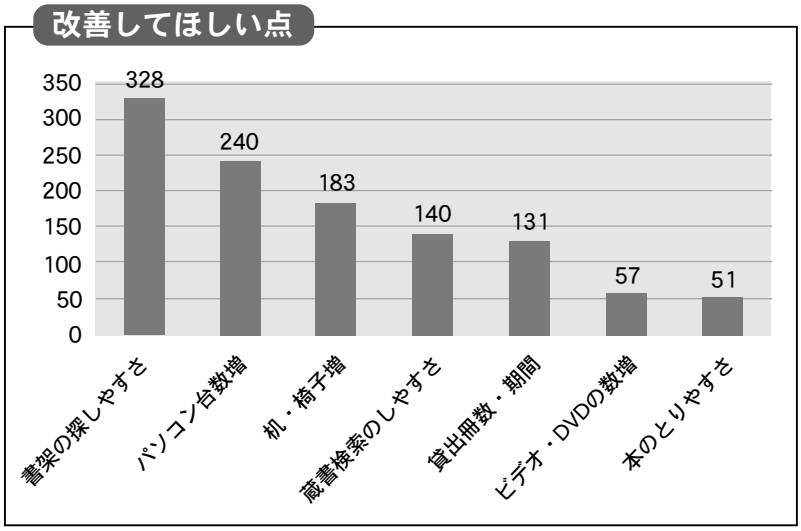
図書館の書架の高さ、資料の探しやすさ、資料の配置、掲示、照明、空調、閲覧席、静寂性、マナー、安全性などについて質問を行いましたが、大変良い、良い、普通の回答が80％を超える状況でした。

また、あまりよくない、悪いと回答のあったもので、以下のものが具体的にあげられていました。

- 館内での携帯電話の使用（通話、机の上に置いた携帯電話の振動、着信音など）
- 話し声、足音（靴音）、携帯音楽プレイヤーのヘッドフォンの音漏れなどの騒音
- 飲食物の持ち込みと飲食
- 資料への書込み・付箋、汚損、切り取りなど

これらのことに関しましては、図書館でも利用マナー向上のためのPRに努めますが、利用者のご協力もいただきたいと思います。

特に回答者から改善を求められたものとして、開館時間の延長（46.8％）（内容：土曜日の開館時間の延長、日曜日開館、平日の開館時間延長、早朝開館、火曜日の午前開館など）があげられます。現在、試験期・卒業論文提出期については、日曜・祝日開館を行っており、平成20年度は９回で授業期の日曜日・祝日の約1/3を開館していることになります。



❻ 図書館に改善してほしい点

図書館に改善してほしい点を選択していただき、多かったものを抜き出しました。書架の探しやすさ、パソコンやプリンターの増設、椅子・机の増設、蔵書検索などが多くあげられました。特に階層ごとの資料配置については、利用しやすいように検討し、改善して行きます。

皆さんからいただいたご意見やご要望については、今後の図書館運営に役立てていきます。
図書館アンケートにご協力くださりありがとうございました。

文大だより　　初等教育学科音楽専攻　卒業演奏会

卒業演奏会を終えて

初等教育学科　音楽専攻４年　小宮山弘子

１月24日土曜日に、うぐいすホールで私たち音楽専攻４年生の卒業演奏会がありました。私たちは２年次からピアノか歌のどちらかを選択し、毎年春と秋に行われるコンサートや試験などを通して、先生方や仲間、先輩後輩たちと切磋琢磨しながら音楽棟で日々音楽を勉強してきました。その集大成として、卒業演奏会という名の公開試験が行われたのです。

この演奏会に向けて、４年の春のコンサートが終わってから本格的に練習を始めました。私は、先生に私らしく、かつ私の課題が含まれている曲を選んでいただき、うぐいすホールという大舞台で演奏することに恐怖や不安を抱きながら、本番までピアノを弾いてきました。

練習を始めたころの一番の悩みは、曲をどれだけ弾いても先が見えなかったことです。だから、少しでも演奏の助けにしようと卒業論文は自分の演奏する曲と作曲家について研究することに決めました。しかし、練習していけばいくほど、指で、頭で覚えていくはずの音符たちが上手く掴めず、レッスンが終わる度に毎回激しく落胆し、私とは逆に、周りの仲間たちは毎日着実に成果が出ているので、気ばかり焦っていたように思います。そんな私を励ましてくれたのは、仲間や後輩たちでした。音楽棟での何気ない会話、演奏会の最後で披露する４年合唱の楽しい練習を通して、もう少し努力してみようかな、と元気を貰っていました。

本番の３日前からうぐいすホールでの練習が始まりました。「この広い空間は私のものだ」と思っても、ノミのように小さい心臓のため、リハーサルでは極度に緊張していつも出来るところが出来なかったり、途中で止まってしまったり、先生には「あなたらしさが出てこないね」と言われました。そこで、本番の日まで「私らしさ」について色々な人に相談し、考えていました。上手くいかなくても、演奏に自分の想いが乗せられても、途中で爆発しても消滅しても、どんなことがあっても、それが「私らしい演奏」ということだ、と思えたことで全てのことが吹っ切れました。あとは、リハーサルで失敗してしまった所の楽譜を何回も読んで頭に入れて、本番を楽しむことだけだと。

本番の私の演奏は、１つだけ悔いの残る箇所がありましたが、最後まで諦めず、自分の想いを伝えることができたことに満足しています。そして、４年間たくさんの曲やピアノを通して自分にきちんと向き合うことが出来たことに幸せを感じています。

この演奏会は、たくさんの先生方や先輩後輩、そして仲間たちの支え無しには成功しなかったと思っています。また、家族や先輩や友人などたくさんの方々が聴きに来てくださったことに本当に感謝しています。演奏会までのこと、音楽専攻で過ごし経験したことを糧に、これから社会に出ても何事にも努力していきたいと思います。

文大だより　初等教育学科美術専攻　卒業制作展

卒業制作展を終えて

会場風景

初等教育学科　美術専攻４年　清水健吾

私たちが所属する初等教育学科美術専攻では　２月２日(火)～２月７日(土) の６日間、コミュニケーションホールのアートシアターにおいて卒業制作展を催しました。お蔭様で、短い会期ながら学校関係者、地域住民の皆様を合わせ300人以上の方が本展に足を運んでくださり、大成功と言える形で終えることができました。

今回展示した作品は主に４年次より制作を始めたもので構成しました。各自がこの大学４年間の集大成といえる作品制作に多くの時間と労力を費やし、その結果を展覧会として、公の場で発表できたことはとても有意義であったと思います。

また１つの展覧会を作り上げるということの大変さも経験することができました。２つのゼミから代表者を決め幾度と無く会議を繰り返し、ポスターや看板制作を分担して行い、地域のお店に宣伝協力をお願いして、多くの方に来ていただけるよう努力しました。

搬入は朝から集まり搬入プランを確認し、専攻生が一丸となってスムーズな搬入をすることができましたが、その後の作品の展示に皆、試行錯誤を繰り返していました。作品の配置、照明の当たり具合など、今まで狭いゼミ室の中でしか作品と向かい合ってこなかった私たちには広い空間を使い、魅せる作品展示をするというのはとても難しいことでしたが、先生方の御指導のもとに、半日かけてようやく展示空間を作り上げることができました。展示の仕方ひとつで作品を良くも悪くも見せることができるということを専攻生の皆が感じているようでした。

搬出は搬入時の反省を活かし、予定より早く終えることができました。立つ鳥跡を濁さずという諺がありますが、展覧会の余韻の一切無い空っぽの空間を後に若干の寂しさと卒業を実感しました。

来年度以降の卒業制作展にもより多くの地域住民、文大教職員、学生の皆様に美術専攻の活動と成果を見ていただきたいと心から思っています。最後になりましたが、御高覧賜りました全ての皆様と、卒業制作展に御協力いただいた学校関係者、地域の皆様に深い感謝の念を送らせていただきます。ありがとうございました。

清水健吾「不確かな風景」

八桁　健「海へ」

新本恵梨子「ひみつのヤモリハウス」

藤原慎平「きりんさん」

文大だより

感動に包まれた

都留文科大学音楽教室コンサートシリーズ　No.23
『山下“Topo”洋平スペシャルコンサート』

去る2009年１月27日(火)夕刻より、音楽研究棟Mホールに於いて、都留文科大学音楽教室主催コンサートシリーズNo.23『山下“Topo”洋平スペシャルコンサート～ケーナ、サンポ―ニャによる民族楽器を越えた魅惑のLIVE～』が繰り広げられた。これは“文大で世界を聴こう！”と初等教育学科音楽教室が毎年企画、世界を舞台に活躍する方々の演奏を実際の学び舎で聴けるところから、学生の期待も大きく、毎回大きな感動の拍手に包まれている。

山下洋平氏は19歳でプロとしての活動を始めている。単身南米ボリビアに渡り、2006年まで当地のフォルクローレグループ「グルーポ・カンタンティ」の活動に参加。2005年にはアルゼンチンギタリスト、アリエル・アッセルボーンとのデュオアルバム『Free Talk』をリリース。また、2007年には第20回東京国際映画祭コンペティション部門出品作品『ハブと拳骨』の楽曲提供をしている。

民族音楽・楽器を越えた魅力を追及する彼は、現在「日本人としていったい何ができるのか？」と言う問いかけを、自ら課しながら歩んでいる。演奏会では10曲ほどのレパートリー演奏の合間で、そうした音楽、人種、それらを取り巻く様々な現況や、そこに対する自分の思いなどを語ってくださった。視野が狭くなりがちな都留の学生にとって、何よりのプレゼントであった。

フォルクローレの代表格である「コンドルは飛んでいく」、アルゼンチンの今流行の作曲家 A.ピアソラ の作品など、どれも確実な技術を基盤とした素晴らしいものであったが、彼のオリジナル作品が演奏されると、南米の民族楽器が静かな感動と興奮を呼び起こした。「ずっと聴いていたい」「勇気をいただいた」「涙があふれた」といった学生の感想が多く、まさに言葉では説明できない喜びが、音楽によってもたらされるということを再認識できた。

共演は実際の兄である山下晋平（ピアノ）、栗山豊二（パーカッション）のお二人。すでに三人によるＣＤ〈One day One life〉がリリースされているが、その息のあった演奏に、最後まで拍手が鳴り止まなかった。今後もこうした感動のコンサートシリーズを、企画、演出していきたいと願っている。

初等教育学科音楽教室
教授　清水雅彦

三人による息のあった演奏に観客も聞き入った

平成21年４月設立の公立大学法人都留文科大学役員予定者を公表

都留市は１月30日に公立大学法人都留文科大学の役員の全予定者を決定し、右記のとおり公表しました。これにより、今年４月からの法人運営組織が決定しました。

理　事　長：西室陽一（都留文科大学法人化推進本部顧問／元東京ガス㈱代表取締役専務）
副理事長：今谷　明（都留文科大学　学長）
理　　事：椎　廣行（都留文科大学法人化推進部長／元国立大学法人大阪教育大学理事・事務局長）
理　　事：高田理孝（本学初等教育学科教授／企画室長）
理　　事：福田誠治（本学比較文化学科教授／大学院研究科委員長）
非常勤理事：渡辺利夫（拓殖大学　学長）
非常勤理事：田中一利（都留市商工会　会長）
非常勤監事：鈴木俊光（弁護士・明治大学名誉教授）
非常勤監事：鵜川正樹（公認会計士・税理士）

文大だより

山梨の魅力メッセンジャー 46名に認定証交付

２月４日(水) ２号館101教室において、平成20年度山梨の魅力メッセンジャー認定証の交付式が開催されました。今年は46名の学生が認定され、比較文化学科３年の雨宮弘さんが代表し、山梨県観光部進藤部長から山梨魅力メッセンジャー認定証の交付を受けました。

このメッセンジャー制度は、山梨県が県内８校の大学などに在籍する学生約270名を対象に、講義と現地視察を通じて山梨の魅力を学び、卒業後も山梨ファンとして山梨の魅力を県外に積極的に伝えていくことを目的としている制度で、本学では、社会学科環境･コミュニティ創造専攻の泉桂子講師の地域交流研究Ⅲと地域学がこの制度の連携講座となっています。

認定された46名は、出身地などに帰省した際に山梨県の特産品や観光地のＰＲに協力するばかりではなく、本学の魅力についても伝え広げることが期待されます。

認定証の交付

地域交流研究センター公開教育講座開催

明日から使える 構成的グループ･エンカウンター講座

主催：地域交流研究センター地域教育相談室

２月12日(木) 午後６時15分から本学コミュニケーションホールにおいて地域交流研究センター地域教育相談室が主催する「明日から使える構成的グループ･エンカウンター講座」が開催されました。

当日は本学地域交流研究センター非常勤講師の品田笑子氏と初等教育学科非常勤講師の武蔵由佳氏が講師を勤め、現職教員の方々や教員志望者を対象として「構成的グループ･エンカウンター」を取り入れた学級での意図的なふれあい体験の手法を実践的に行いました。

講習時間は２時間半に及んだが、ふれ合い・認め合い・ささえ合う学級集団を育てるために、受講者にはその手法と効果を実感してもらう講座となりました。

第２回子ども理解講座

主催：初等教育学科臨床教育学コース
共催：地域交流研究センター

２月14日(土) 午後１時から本学１号館215教室において、初等教育学科臨床教育学コース共催による「子どもの『自己』の育ちを支える」を総合テーマとした「第２回子ども理解講座」が開催されました。

この講座は、昨年から同一テーマとして開催しており、地域と日本の子ども援助と教育の課題を考えあうため、今号のぶんだい堂にも紹介している、本学初等教育学科田中孝彦教授編著の『現代の発達援助実践と教師像』を素材としたシンポジウムで、本学卒業生で同書の執筆者の一人でもある渡邉由之氏や本学学生などから現代の教師のかかえる問題点などの意見交換が行われました。

また、北海道教育大学教職大学院の福井雅英教授の子ども理解、発達援助の実践、教師の仕事などの今日的な課題などの講演会も開催され、現職教員や子どもを支える行政関係者など専門職の参加者が多く、充実した内容の講座となりました。

本学の広報誌「都留文科大学報」は、今号で109号を迎える。創刊1974年、年間総発行部数13800、６人の広報委員により編集され、年間掲載氏名数は800におよぶ。「旅立つ言葉」や「卒業論文・研究論文・修士論文一覧」からは、学生それぞれの充実感と成果、反省や今後の抱負などが垣間見られ、一人ひとりの息遣いが聞こえてくるようである。

「大学は一つの共同体であります。…学生諸君にも教職員各位にも同じように学内の事情を知ってもらい、わが大学の動向を知り、考え行う正しい資料として役立てて頂きたい」（学長・下泉重吉「静かな美しい自然の中にある平和な大学」第１号、1974年1月）。過去の「学報」をひもとけば、この創刊の趣旨に違わず、さまざまな声に出会う。たとえば「お前の大学はえらい楽しそうやな～といわれる」「とんだド田舎だと思ったが、何もないからこそ若者の住むべき地域」など新入生の闊達さ（第51号、1991年6月）や、「町の人口が急増し、楽山自治会は対応に苦慮」「卒業していく学生達にとってこの地が“第２の故郷”的存在になってもらえれば」といった市民の本音（第45号、1989年6月）。新入生担任教員が顔写真入りで紹介されるなど（臨時号、1992年4月）、全学3000人規模（2009年現在）の「文大」ならではの親密な素顔が表れている。

裏表紙にエッセー（現・編集後記）が始まり、３月号に全卒業生・修了生の論文題目が掲載される現在の構成になったのは2001年度のこと。卒業式で全卒業生・修了生の手に渡り、春・夏のオープンキャンパス（1999年度開始）では受験生に配られるようにもなった。さらに各号約3000部は、都留文科大学後援会（1996年度設立）の正会員、つまり学生の保護者または保証人の元に「後援会NEWS」とともに届けられるようになり、発行部数も大幅に増えたのである。

現在「学報」の熱心な読者は学生というよりはその家族のようであり、「大学から届いたよ、見たよ」と電話口で話題になると聞く。創刊から35年、大学をめぐる社会情勢こそ大きく変化したが、広い意味での本学の共同体は保持されていると見える。大学の日々の記録ともいうべき学報は、大学の現在と未来を見つめつづける。

編集後記

学報ものがたり

岸　清香

本 ぶんだい堂

封建制の文明史観
近代化をもたらした歴史の遺産
今谷　明／著
2008年11月 出版

PHP新書
760円＋税
◇いまたに　あきら
本学学長

臨床教育学シリーズ②
現代の発達援助実践と教師像
田中孝彦／編著
2008年12月 出版

群青社
2,400円＋税
◇たなか　たかひこ
初等教育学科教授

我を絵に看る
― 芭蕉の甲斐行 ―
楠元六男／著
2009年１月 出版

新典社新書
1,050円（税込）
◇くすもと　むつお
国文学科教授

編集：都留文科大学広報委員会
杉本光司（委員長）
鳥原正敏（副委員長）
髙橋宏幸　鷲　直仁　菊池信輝
岸　清香